# 里　館　遺　跡

## 第 58 次発掘調査報告書

—宅地造成及び共同住宅建築に係る埋蔵文化財調査—

2014 年 5 月 16 日

工　藤　善　蔵

盛岡市教育委員会

# 例　　言

1　本書は平成25年度に実施した、盛岡市北天昌寺町10－1、11－1、12－1、16－2、16－3に所在する里館遺跡第58次発掘調査報告書である。

2　この調査は工藤善蔵氏が実施する宅地造成工事及び共同住宅建設に伴い、対象範囲に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査である。

3　この調査は土地所有者であり、事業主の工藤善蔵氏と、盛岡市教育委員会との間に締結された埋蔵文化財に関する協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査と資料整理を実施して報告書を作成・編集した。野外調査から報告書作成にかかる経費は、事業主である工藤善蔵氏が支出した。

4　本書の執筆・編集は、盛岡市遺跡の学び館室野秀文・鈴木俊輝が分担して行った。

5　調査地の平面位置は日本測地系による公共座標第X系座標値を変換した調査座標を用いた。

里館遺跡　　調査座標原点　X－32,000・Y＋24,500　→　RX±0・RY±0

6　高さは標高値をそのまま用いた。

7　遺構記号は次のとおりである。

（1）城館期（概ね12世紀～16世紀）

| 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 柵・柱列跡 | SA | 掘立柱建物跡 | SB | 竪穴建物跡 | SI |
| 堀・溝 | SD | 土　塁 | SF | 土　坑 | SK |

（2）城館期以外

| 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 竪穴建物跡 | RA | 土　坑 | RD | 溝 | RG |

8　調査業務のうち空中写真撮影を株式会社タックエンジニアリングに委託した。

9　発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から有益な御指導、御助言をいただいた。（五十音順敬称略）

岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、
金子佐知子（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、鈴木弘太（一関市教育委員会）、
中野晴久（常滑市歴史民俗資料館）、羽柴直人（岩手県立博物館）、増山禎之（田原市教育委員会）、
八重樫忠郎（平泉町役場）

10　発掘調査による出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

# 目　　次

例　言
目　次
　挿図目次　表目次　図版目次
Ⅰ　遺跡の環境……1
Ⅱ　調査の経過……4
Ⅲ　調査成果……8
Ⅳ　総　括……27

# 挿　図　目　次

第 1 図　里館遺跡位置図……1
第 2 図　里館遺跡全体図……3
第 3 図　第 58 次調査遺構全体図……6～7
第 4 図　縄文時代の遺構と遺物……9
第 5 図　SD509 外溝・SD510 内溝西半部、SB510 櫓状掘立柱建物跡……10
第 6 図　SD509 外溝・SD510 内溝跡東半部……11
第 7 図　SI504 竪穴建物跡、SD511・512 溝……13
第 8 図　SB504・505・506・507 掘立柱建物跡……14
第 9 図　RB508・SB509・512 掘立柱建物跡……15
第 10 図　SB511・513・514 掘立柱建物跡……16
第 11 図　SB515・516・517・518・519 掘立柱建物跡、SA502 柵跡、SD513 溝……17
第 12 図　SB515～519 掘立柱建物跡、SA502 柵跡、掘立柱列跡土層断面図……18
第 13 図　掘立柱列跡、SD502 溝、調査区北壁土層断面図……19
第 14 図　柱穴土層断面図 1……20
第 15 図　柱穴土層断面図 2……21
第 16 図　土　坑……22
第 17 図　古代以降の出土遺物……23
第 18 図　里館遺跡西部の遺構……29
第 19 図　里館遺跡の地割……29

# 表　目　次

第１表　里館遺跡第58次調査遺構一覧表 …… 24
第２表　里館遺跡第58次発掘調査出土遺物一覧表 …… 26
抄　録 …… 31

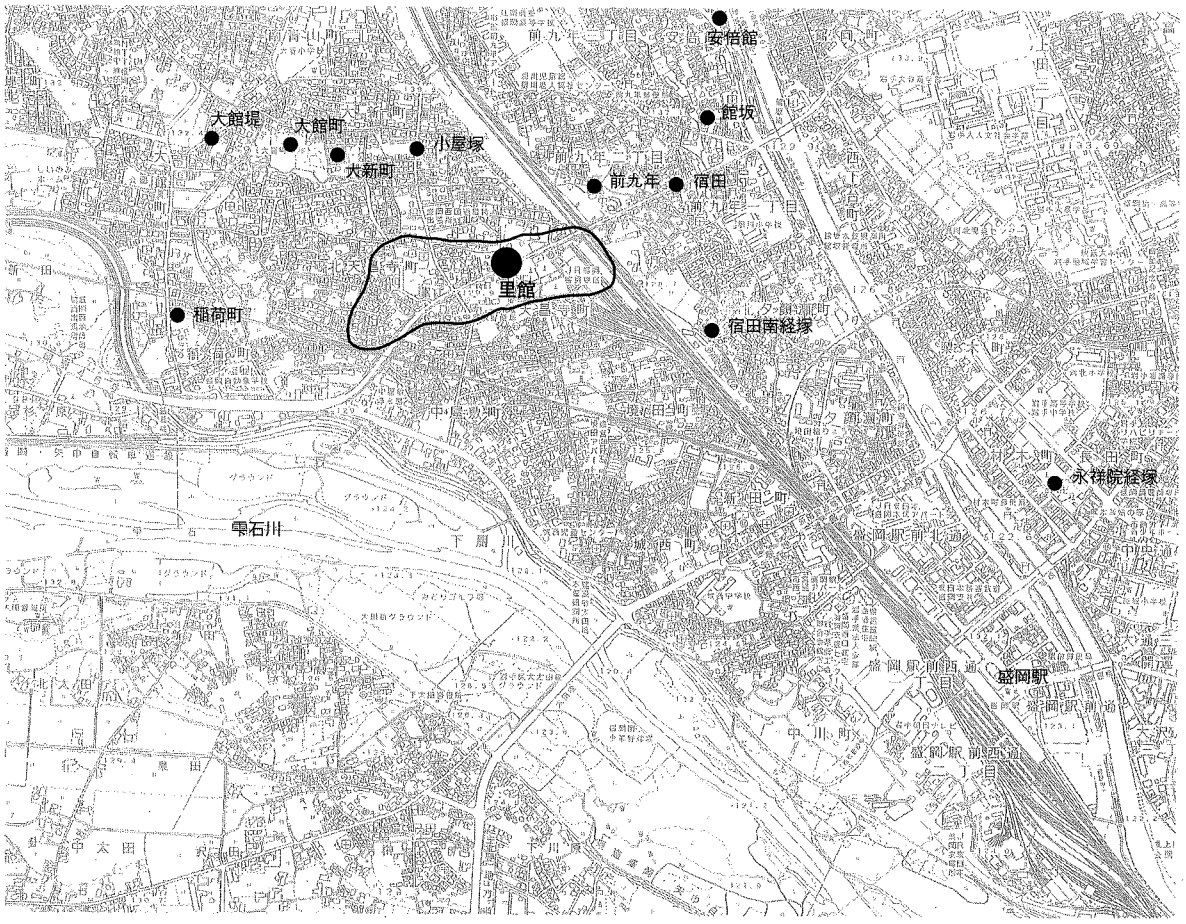
# 図　版　目　次

第１図版　遺跡全景
第２図版　調査区全景
第３図版　調査区全景
第４図版　SD509外溝、SD510内溝、SB510建物跡
第５図版　SB510建物跡、SD509外構、SD510内構
第６図版　SD509外溝
第７図版　SI504竪穴建物跡、SD511溝
第８図版　土坑
第９図版　SA502柵跡、RD009土坑
第10図版　出土遺物１
第11図版　出土遺物２

# Ⅰ　遺跡の環境

## 1　位置と地形

里館遺跡は東北新幹線盛岡駅の北西約２ｋｍ、盛岡市天昌寺町、北天昌寺町に所在する遺跡である。これまでに縄文時代、平安時代、中世、近世の遺構・遺物が確認されている。本遺跡から北西 19 ｋｍの岩手山（標高 2038 m）の火山噴出物で形成された滝沢台地（火山灰砂台地）は、岩手山麓の滝沢市滝沢柳沢から盛岡市青山町、大新町、大館町、前九年一・二丁目まで張り出している。台地先端部の前九年二丁目付近は標高 140 m前後で、ここからは北上川と雫石川合流点を俯瞰できる。里館遺跡や天昌寺の位置はこの滝沢台地先端部の南西側に、一段低く形成された河岸段丘（砂礫段丘）の南辺部である。標高は 130 m～ 132 m、雫石川河床面との比高は 5m ～ 7m で、遺跡の南辺は高さ３ｍ～５ｍの段丘崖となっている。




第１図　里館遺跡位置図

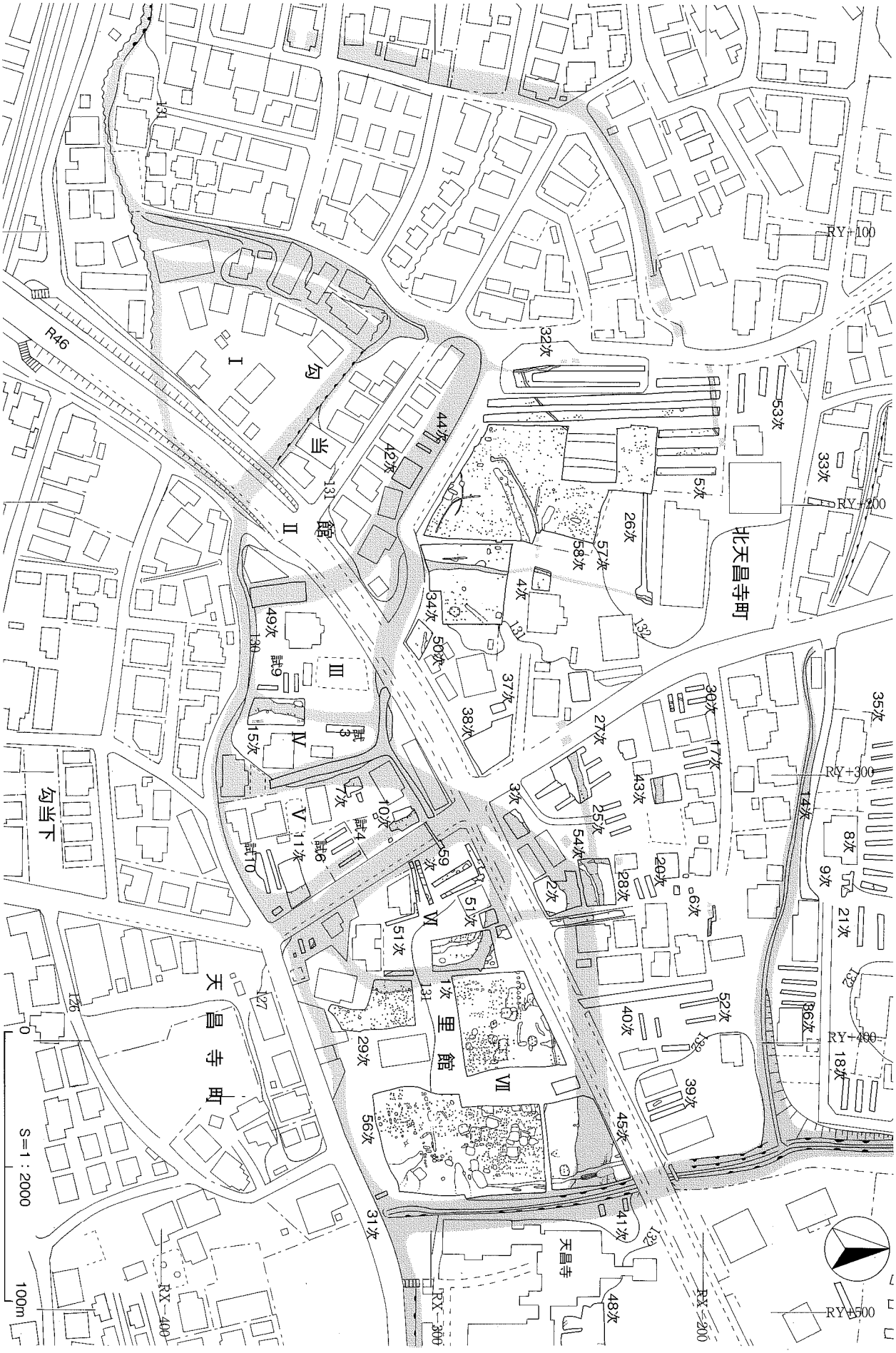
## 2　歴史的環境

本遺跡北側の滝沢台地南辺部には、大館堤遺跡、大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡、前九年遺跡、宿田遺跡、館坂遺跡、安倍館遺跡が並んでおり、これらは縄文時代から古代の集落遺跡である。このうち大館町遺跡では縄文時代中期の集落跡のほか、弥生時代前期の竪穴住居跡も確認されている。古墳時代の遺跡は北夕顔瀬町の宿田南遺跡で北海道系の後北 C2-d 式土器が出土し、安倍館遺跡では滑石製の円盤形模造品が発見されている。また、宿田遺跡には 7 世紀から 9 世紀初頭に至る群集墳が形成されており、5 世紀ごろの古式土師器と黒曜石製の母指状掻器も出土している。大館町遺跡では 7 世紀から 8 世紀の集落跡。大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡では、奈良・平安時代の集落が確認されている。里館遺跡でも第 56 次調査で平安時代 9 世紀ごろの竪穴住居跡が確認されている。

この地域は岩手郡の南部に位置し、雫石川の北岸地域は古来厨川（栗屋河・栗谷川）と呼ばれてきた。厨川は雫石川の古い呼び名であったという伝承もある（『岩手郡誌』）。康平 5 年（1062）前九年合戦の最後の戦場となった厨川柵と嫗戸柵については、盛岡市の安倍館遺跡や里館遺跡、大館町遺跡付近が擬定地とされてきた。現在までに柵跡は確定していないが、大新町遺跡や小屋塚遺跡では掘立柱建物跡や竪穴建物跡と 11 世紀前葉ごろの土器群が確認されている。また近年大館町遺跡から 11 世紀から 12 世紀の土器やかわらけが出土し、境橋遺跡や上堂頭遺跡、宿田遺跡でも 11 世紀前半ごろの遺構遺物が確認されている。一方安倍館・里館遺跡は中世城館跡であることは明らかであるが、11 世紀の安倍氏の柵を示す遺構遺物は確認されていない。安倍氏、清原氏の滅亡後、藤原清衡は平泉に拠点を移し、安倍氏、清原氏の基盤を受継いで奥羽両国を統治した。斯波郡には藤原氏一族の樋爪氏が入り、この地方を所管していた。このころの遺構遺物は大館町遺跡、稲荷町遺跡、里館遺跡で確認されており、大館町・大新町遺跡では数条の大溝、稲荷町遺跡は堀で囲まれた居館跡、里館遺跡では大溝と掘立柱建物が確認されている。これらは奥州藤原氏の拠点に関連する遺跡と推定されている (1)。

里館遺跡東南の宿田南遺跡では、台地西端部に宿田南経塚があり、妙法蓮華経の礫石経が多数埋納されていた。土器や陶磁器類は出土せず詳しい年代は不明であるが、経文からは中世前半ごろと推定されている。里館遺跡は天昌寺 (2) 西側の里館とその西側の勾当館に至る範囲にある。遺跡東半部の里館付近からは主に 14 世紀、15 世紀から 16 世紀の遺構遺物が集中し、13 世紀の遺物も散見される。遺跡西半の勾当館付近では、12 世紀以降の堀や溝、12 世紀ごろの掘立柱建物や竪穴建物、柵、溝などが確認されているほか、14・15 世紀から 16 世紀の遺物も散見される。一方安倍館遺跡では 15 世紀から 16 世紀の遺構遺物が確認されているが、陶磁器の年代から城館の盛時は 16 世紀代であり、主に 16 世紀の中ごろから後半にかけて拡大されたことが指摘されている。安倍館遺跡は戦国時代後期の栗谷川城であり、里館遺跡は栗谷川城以前から存在した工藤氏の城館跡と考えられる (3)。

江戸時代の盛岡藩政下では厨川通厨川村に属し、盛岡城下から秋田領へ向う秋田街道が雫石川の北岸を通じ、安倍館遺跡の西側を鹿角街道が通じていた。里館遺跡や稲荷町遺跡で確認されている近世の掘立柱建物跡や土坑などは、江戸時代栗谷川村の一部である。




第２図　里館遺跡全体図（Ｓ＝1：2000）

# Ⅱ　調査の経過

## 1　調査経過

平成24年、盛岡市北天昌寺町に在住する工藤善蔵氏より、盛岡市北天昌寺町10－1、11－1外の土地を宅地造成し、併せて共同住宅2棟を建設すると言う内容で事前協議があった。この場所は埋蔵文化財里館遺跡の北西部にあたる。過去の調査では平安時代末期から中世にかけての遺構、遺物が確認されていたため、事業範囲内にも埋蔵文化財の存在が予測された。

平成25年2月6日、工藤善蔵氏より埋蔵文化財発掘届が提出され、同日付で岩手県教育委員会あて進達した。同年2月12日付けで岩手県教育委員会より工事着手前に試掘調査を実施するよう通知があり、同日付で事業主に伝達した。試掘調査は里館遺跡第57次調査として平成25年5月27日から28日に市費により実施した。試掘調査トレンチを南北方向に3条設定し、重機による表土除去ののち、人力による遺構確認を実施した。その結果平安時代末期以後の溝や柱穴等が確認され、開発に先立ち、本発掘調査が必要であることが明らかになった。これに基づき、調査日程や調査範囲、調査費等について事業主と教育委員会の間で協議を重ねた。その結果事業計画範囲のうち、北側2棟の共同住宅と南側宅地造成区画との間に設けられる駐車場部分については、遺構を保存することで本発掘調査の対象から除外することにし、残りの共同住宅2棟と宅地造成部分について本発掘調査を実施することになった。

平成25年9月12日付で発掘届けが提出され、同年9月25日付で岩手県教育委員会より工事着手前に本発掘調査を実施するよう通知があり、同日付で事業主に伝達した。同年10月10日付で事業主工藤善蔵氏と盛岡市教育委員会との間で埋蔵文化財に関する協定書を締結。本発掘調査は里館遺跡第58次調査として同年10月15日より調査を開始し、同日付で岩手県教育委員会宛て埋蔵文化財発掘調査着手を報告した。現地調査は平成25年12月26日で終了。以後、遺跡の学び館において発掘調査成果を整理し、平成26年5月16日に作業を終了した。

## 2　調査要項

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 調査遺跡名 | 里館遺跡　（第58次調査） |
| 2 | 調査地の所在地 | 盛岡市北天昌寺町10－1・11－1・12－1・16－2・16－3 |
| 3 | 調査原因 | 宅地造成及び共同住宅の建築 |
| 4 | 事業主体 | 工藤善蔵 |
| 5 | 調査期間 | 発掘調査　平成25年10月15日～同年12月26日 |
| | | 整理作業　平成26年1月4日～同年5月16日 |

6　調査面積　　2,209㎡

7　調査体制

盛岡市教育委員会　教育長　千葉　仁一　　教育部長　鷹嘴　徹　　教育次長　柴田道明

歴史文化課

○　事務局

課長兼遺跡の学び館長　袖上寛

課長補佐　木村英樹

学芸主査　岡　聰

文化財主査　権頭祐子

文化財主査　今野公顕

文化財主任　佐々木亮二

学芸員　大沼信忠

主事　寺島幸子

主事補　佐藤美沙

文化財調査員　福島茜

文化財調査員　鳥取邦美

文化財調査員　萱岡雅光

事務嘱託　齊藤晃大

○　遺跡の学び館

主幹兼遺跡の学び館長補佐　千田和文

文化財主査　室野秀文（調査担当）

主査　田山淳一

文化財主査　菊地幸裕

文化財主査　津嶋知弘

文化財主査　神原雄一郎

主任　江本敦史

文化財主任　花井正香

文化財調査員　佐々木紀子

文化財調査員　木幡里美

学芸調査員　山岸香澄

学芸調査員　山野友海

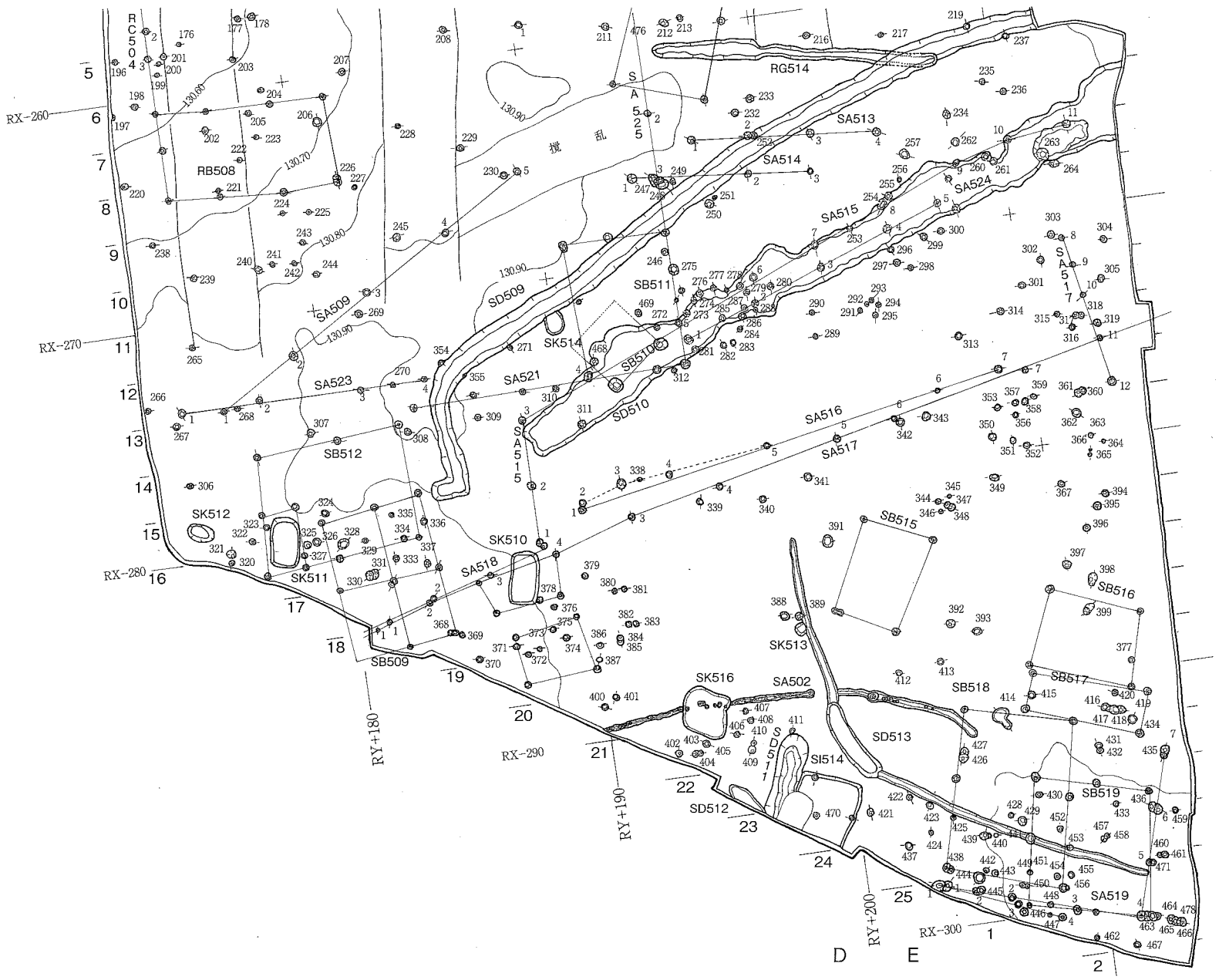
文化財調査員　鈴木俊輝（調査担当）

○　発掘調査及び整理作業（五十音順敬称略）

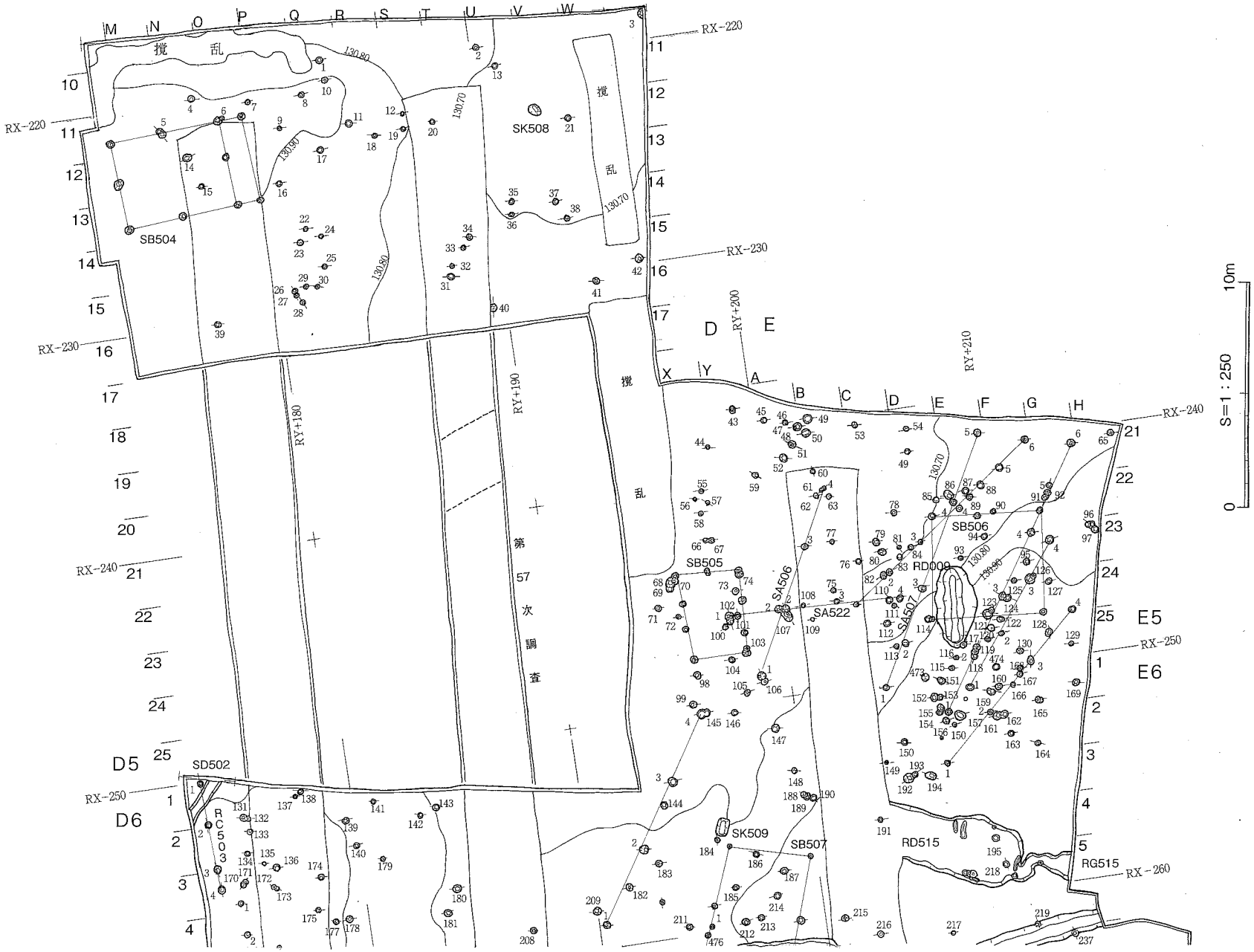
阿部正幸、天沼芳子、嘉糠和男、久慈玲子、熊谷あさ子、小松愛子、佐藤和子、佐藤公一、佐藤美智子、平舘聖、竹花栄子、谷藤貴子、千葉 里子、永沼光子、中村繁子、野中蕃、袴田英治、樋口泰子、日野杉節子、藤原亮子、松岡ふみ子、松本善枝、女鹿麗子、山本光子

○　調査協力

株式会社タックエンジニアリング（空中写真）　大和ハウス工業株式会社　北進測量設計株式会社




第３図　第58次調査遺構全体図


M N O P Q R S T U V W
X Y A B C D E F G H
RX-220
RX-230
RX-240
RX-250
RX-260
RY+180
RY+190
RY+200
RY+210
D5
D6
D
E
E5
E6
SB504
SK508
SB505
SB506
SA506
SA507
SA522
RD009
SD502
RC503
SK509
SB507
RD515
RG515
第57次調査
撹乱
130.80
130.70
130.90
0
10m
S=1 : 250

(S=1 : 250)

# Ⅲ　調　査　成　果

第58次調査地点は里館遺跡の西部にあたり、遺跡の南側段丘崖から80ｍ～100ｍ北側に位置する。この段丘は河川堆積物の黄灰褐色ないし黄褐色のシルト層で形成されるが、今次調査区ではシルト層の中には被熱して脆くなった礫が散見された。第1次調査や第56次調査地点では、シルト層を2ｍ～3ｍ掘削すると、下部に粘性を帯びた黒色土が堆積しており、この土層から縄文時代中期の土器破片が出土している。また、第56次調査や今次調査では縄文時代の陥し穴状土坑が確認されている。このことからこの段丘面は縄文時代中期から晩期にかけて形成されたことがわかる。

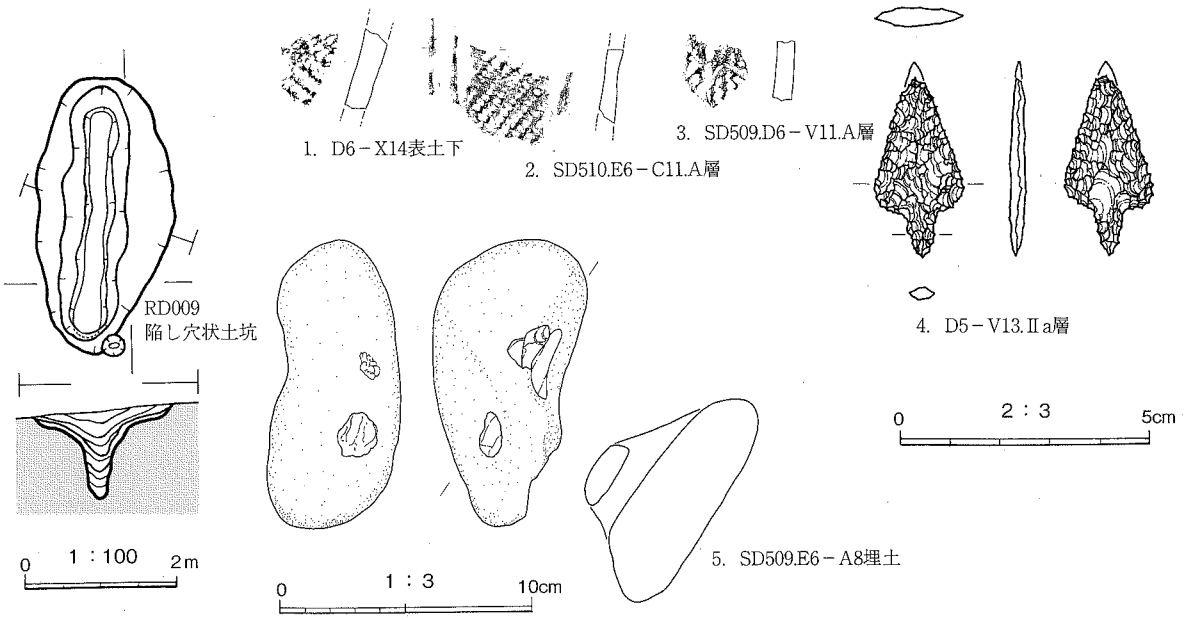
今回の調査区は北側の共同住宅建築2棟と南側宅地造成部分について本発掘調査を実施した。対象範囲のうち、調査区西辺中央部から調査区の北東部にかけて自然低地が存在し、この部分の黄褐色シルト層（Ⅲ層）はゆるやかな低み（第13図）となって、黒色土ないし黒褐色土が堆積している（Ⅱａ層～Ⅱｂ層）。このうちⅡａ層は縄文時代から近世の遺物を包含する。調査区南東部は比較的高く、表土直下は地山の黄褐色シルト層（Ⅲ層）である。調査遺構の主体をなす平安時代末期以後の遺構は、南東部では表土直下の黄褐色シルト層上面に確認され、低地部分ではⅡｂ層上面より掘り込まれている。また縄文時代の陥し穴状土坑はⅢａ層の上面より掘り込まれている。

確認された遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡16棟、柵跡1条、掘立柱列跡22列、溝8条、土坑8基である。第5次、第32次調査で確認されたSD502溝は、今回調査区西端で確認されているが北東部分では大きな攪乱のため確認できなかった。第57次調査（試掘調査）では延長部分に幅2.5ｍほどの低みが認められたが、溝であるか自然地形であるかは不明である。第58次調査では自然低地の北西部にはSB504 掘立柱建物があり、低地の南東部にはSB505・506・507・RB508 掘立柱建物跡。調査区南東部の高位部分からはSB509～519掘立柱建物、SI504 竪穴建物跡が確認された。南東部高位部分の北西辺にはSD509・510溝が併行しており、その南北には溝に近い方向の掘立柱列跡が存在し、北側の自然低地に沿った掘立柱列跡も存在する。土坑は調査区内に散在。ほかに南東部の竪穴建物や掘立柱建物のあたりを区画するSA502柵やSD513溝も存在する。

## 1　縄文時代の遺構・遺物（第4図）

調査区北東部のⅢａ層上面より長楕円形プランのRA009陥し穴状土坑が確認された。規模等は一覧表に示す。埋土は自然堆積で上部は黒色土主体。下部は黒褐色土と褐色土の混合である。出土遺物は無かった。

縄文時代の遺物は遺構外、または新しい時期の遺構から少量出土している。1は縄文時代前期の羽状縄文土器の破片である。2と3は縄文時代中期の土器破片で、2は隆線文が施される。4はⅡａ僧から出土した頁岩製の有茎石鏃である。5は孔のある自然石であるが、人為的穿孔ではなく、縄文時代よりも新しい可能性もある。




第４図　縄文時代の遺構と遺物

## ２　平安時代以降の遺構・遺物

（１）竪穴建物跡（第７図・第17図）

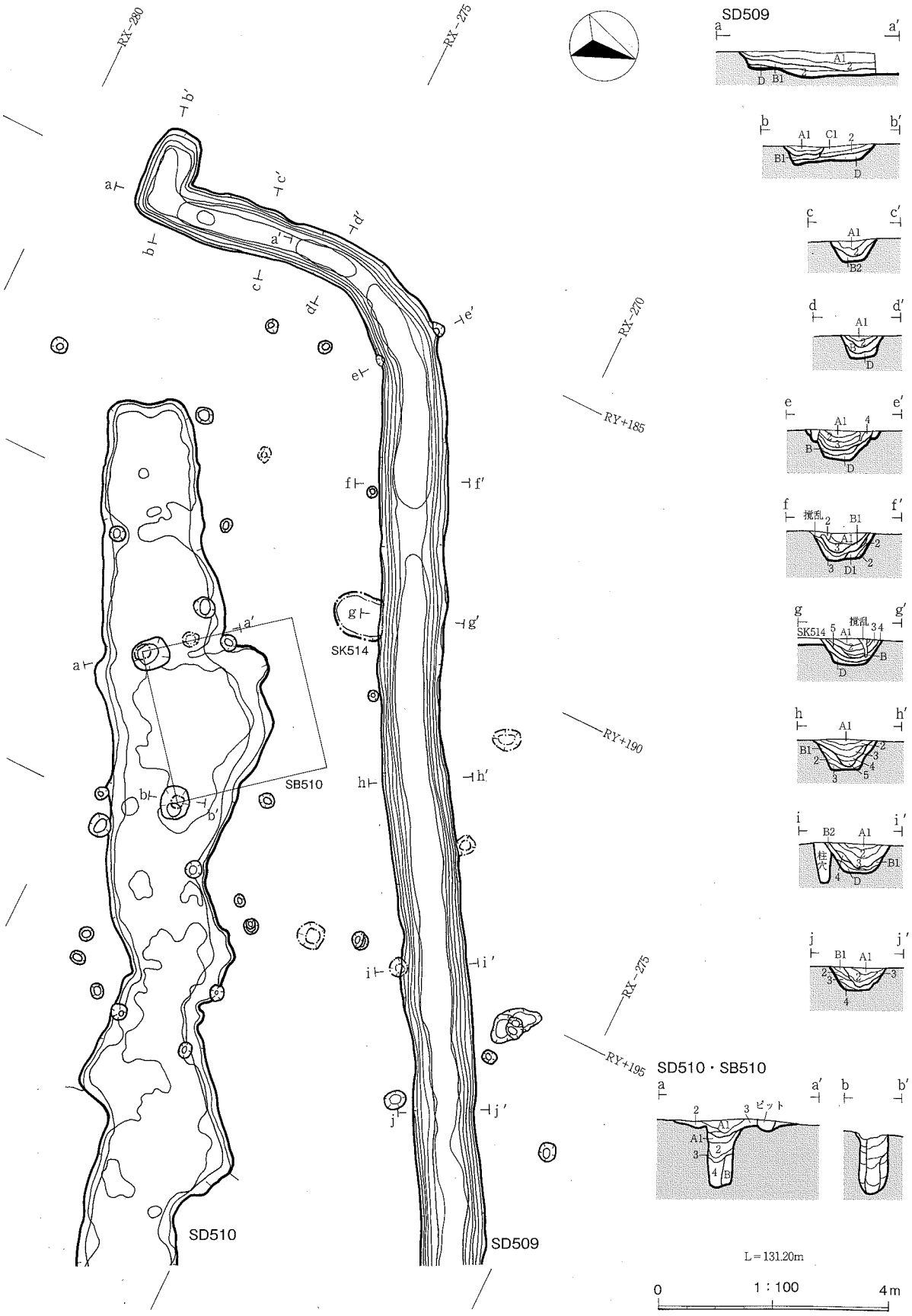
調査区南辺に確認され、SD512溝に西壁を切られ、P470に掘り込まれている。隅丸方形プランの竪穴で、北西から南東には2.83 m、南西から北東には2.76 m以上の規模である。壁高は28 cm～32 cmを測る。床面は平坦であるが、搗き固められているような様子は無い。北壁と東壁中央に浅い柱穴が存在するが、本竪穴建物の柱穴ではなく、竪穴に削平された柱穴である。竪穴の埋土はＡ層とＢ層が暗褐色土と褐色土の混合土。Ｃ層は黒褐色土主体で褐色土粒を混入する。Ｄ層は暗褐色土主体で、埋土はすべて人為的に埋め戻されている。

出土遺物はＡ２層から第17図３のロクロかわらけが出土している。

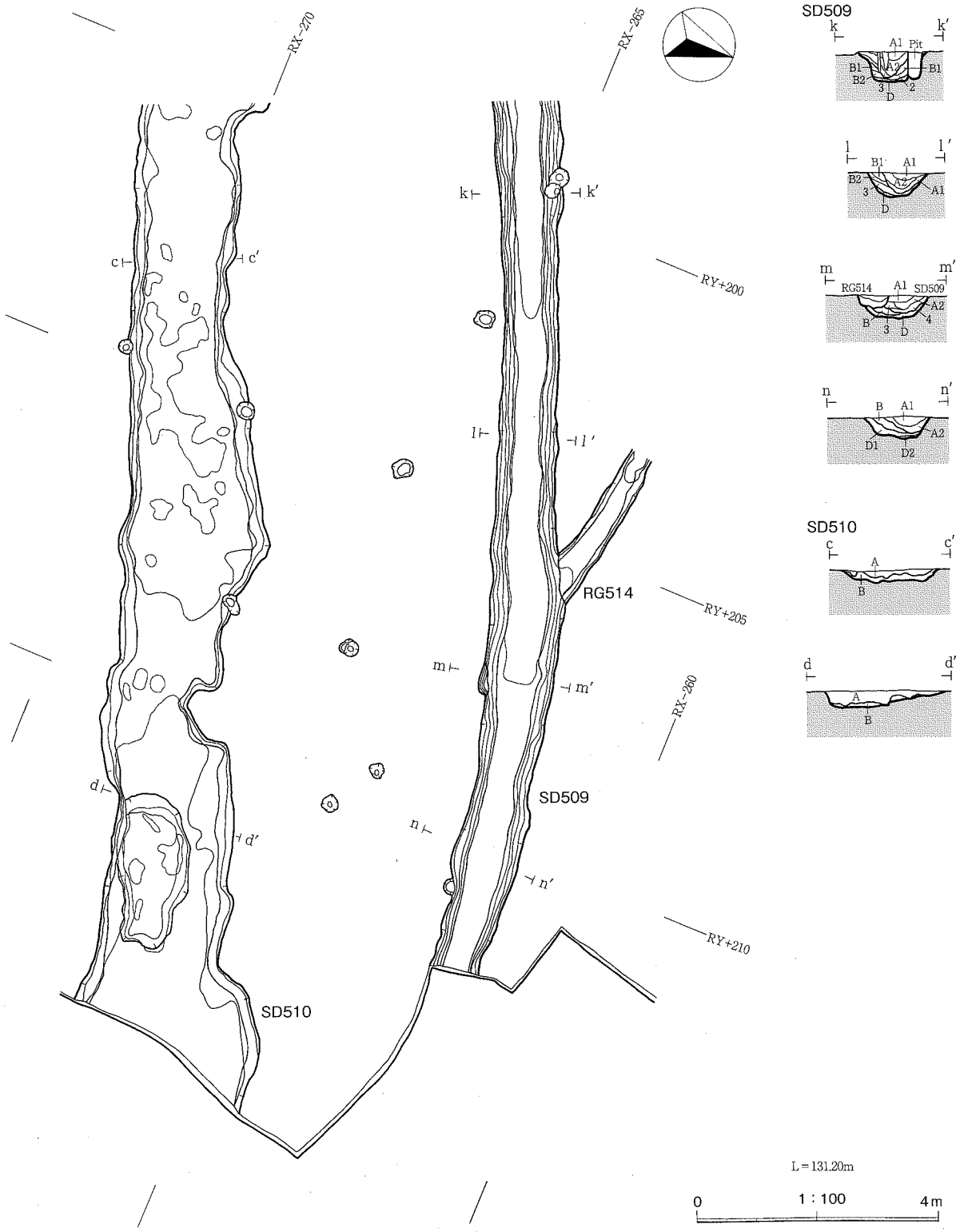
（２）掘立柱建物跡、柱列跡、柵跡（第３図・第５図・第８図～第15図）

調査区全体から掘立柱建物跡（以下建物跡と呼ぶ）や掘立柱列跡（以下柱列跡と呼ぶ）のほか478個の柱穴が確認された。調査区北西部は他と比べて柱穴分布密度が希薄である。

建物跡は比較的小形の建物で、身舎が１間×１間（SB510、513、514、515、516、517）、１間×２間（SB506、507、RB508、SB518）、２間×２間（SB504、509、519）、２間×３間（SB505、508、511、512）がある。２間×２間の建物のうちSB504掘立柱建物跡は身舎の東妻に廂、または縁が付き、SB509建物跡は総柱建物である。また２間×３間建物のSB512建物跡は南西隅に１間×１間の間仕切りがあり、内部にSK511土坑が存在する。１間×１間の建物跡のうち、SB513、514建物跡は、SA516、517柱列跡との位置関係から門の可能性がある。さらにSB510建物は、SD510溝の底面に大形柱穴２口のみ確認された。この建物はSD509、510溝との位置関係から、両溝の間に存在した土塁に伴う櫓状建物と推定される。建物跡のうち、SB511建物跡はSD509、510溝に先行する建物であり、RB508建物跡は出土遺物から近世の建物跡である。




第５図　SD509外溝・SD510内溝西半部、SB510櫓状掘立柱建物跡




第６図　SD509外溝・SD510内溝跡東半部

柱列跡は南西から北東方向に並ぶ柱列跡（SA505～512）、東西または南北方向の柱列跡（SA503、RC504、513、514、521、522、525）、SD509、510溝に近似する方向の柱列跡（SA515、516、517、524）、北西から南東方向に並ぶ柱列跡（SA519、520）が存在する。このうちSA513柱列跡はSD509溝の埋土を掘り込んでおり、SA514柱列跡、SD514溝と併行している。

SA502柵跡は布掘溝内に柵木が間断なく並ぶ。SA513はSD509の埋土を掘り込んでおり、SA514柱列跡、SD514溝と併行している。

（3）溝（第3図・第5図～第7図・第11図・第13図・第17図）

8条の溝のうち、SD502溝は西側の第5次調査及び第32次調査で確認されていた溝の延長部分である。SD503溝は調査区南東部に位置し、SA502柵跡の布掘溝やSB519掘立柱建物跡の柱穴を切っている。SD511、512溝は調査区南側に延びる溝の一部で、SD511溝はSD512溝とSI504竪穴建物よりも新しい。SD509外溝、SD510内溝以外の溝は表1-6を参照されたい。

SD509外溝は断面が逆台形の整った溝で、後述するSD510内溝と併行する溝である。SD509外溝の西端部は、SD510内溝の西端部を包み込むように曲折して終息している。SD509外溝の埋土は自然堆積でA層は黒色土主体、B層は黒褐色土に暗褐色土が混入、C層、D層は黒色土ないし黒褐色土主体で暗褐色土や褐色土の粒や塊が多く混入している。土層は溝の両側から流入しているが、B層、C層は南側から多く流入している。埋土のA層からC層にかけて、かわらけ破片（第17図1、7、8、10）や須恵器系の甕破片（第17図12）が出土している。また、埋土中から径6cmから15cmの自然石が46個出土している。

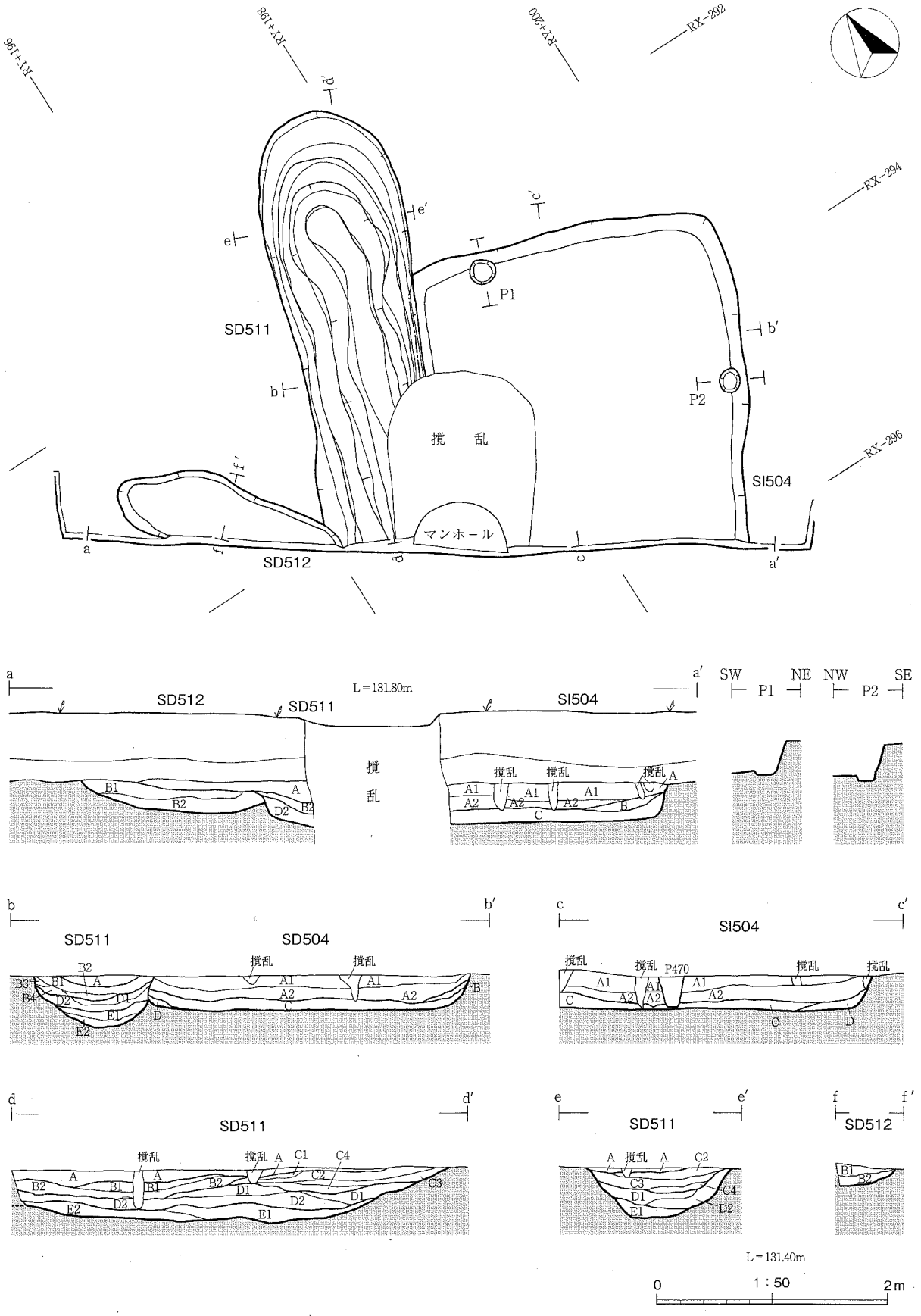
SD510内溝はSD509外溝の南側2.5 m～4.5 mの距離をおいて併行する溝で、平面形、断面形ともに凹凸が著しく、埋土と遺構の壁や底面との境が不明瞭なところがある。土取用の溝であろう。埋土はA層とB層に大別され、A層は黒色土ないし黒褐色土に暗褐色土、褐色土が混入し、B層は暗褐色土と褐色土、黒褐色土の混合土である。

（4）土坑（第16図）

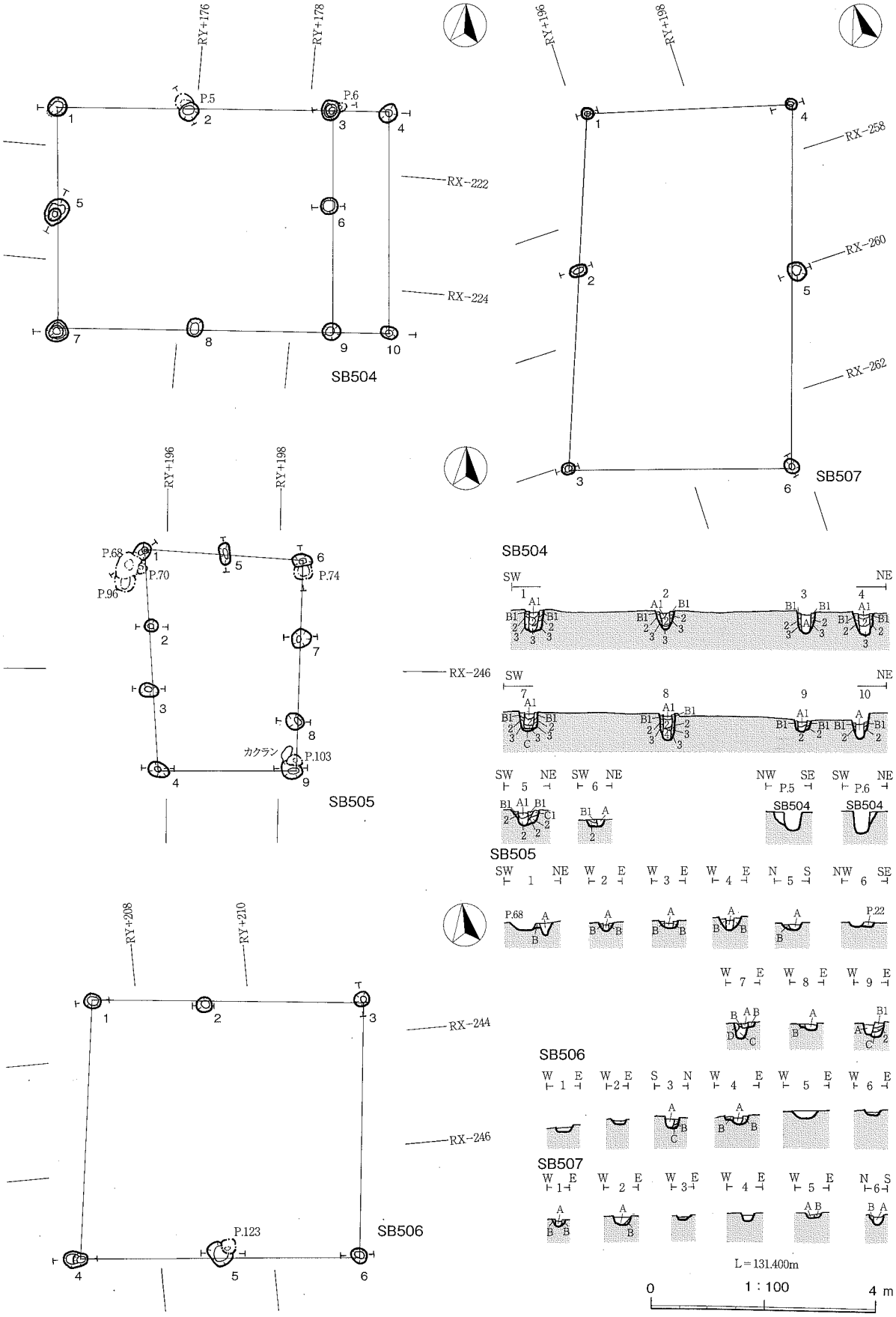
土坑は表1-5を参照されたい。このうちSK510とSK511は隅丸長方形の土坑で、壁は直立し、底面は平坦である。埋土は埋め戻されており、SK511からは土師器甕の破片が出土している。SK511土坑はSB512掘立柱建物の南西隅間仕切内にあり、この建物に伴う可能性がある。SK516は不整方形の竪穴様の土坑。SK509は小形の長方形プランの土坑である。

（5）出土遺物（第17図）

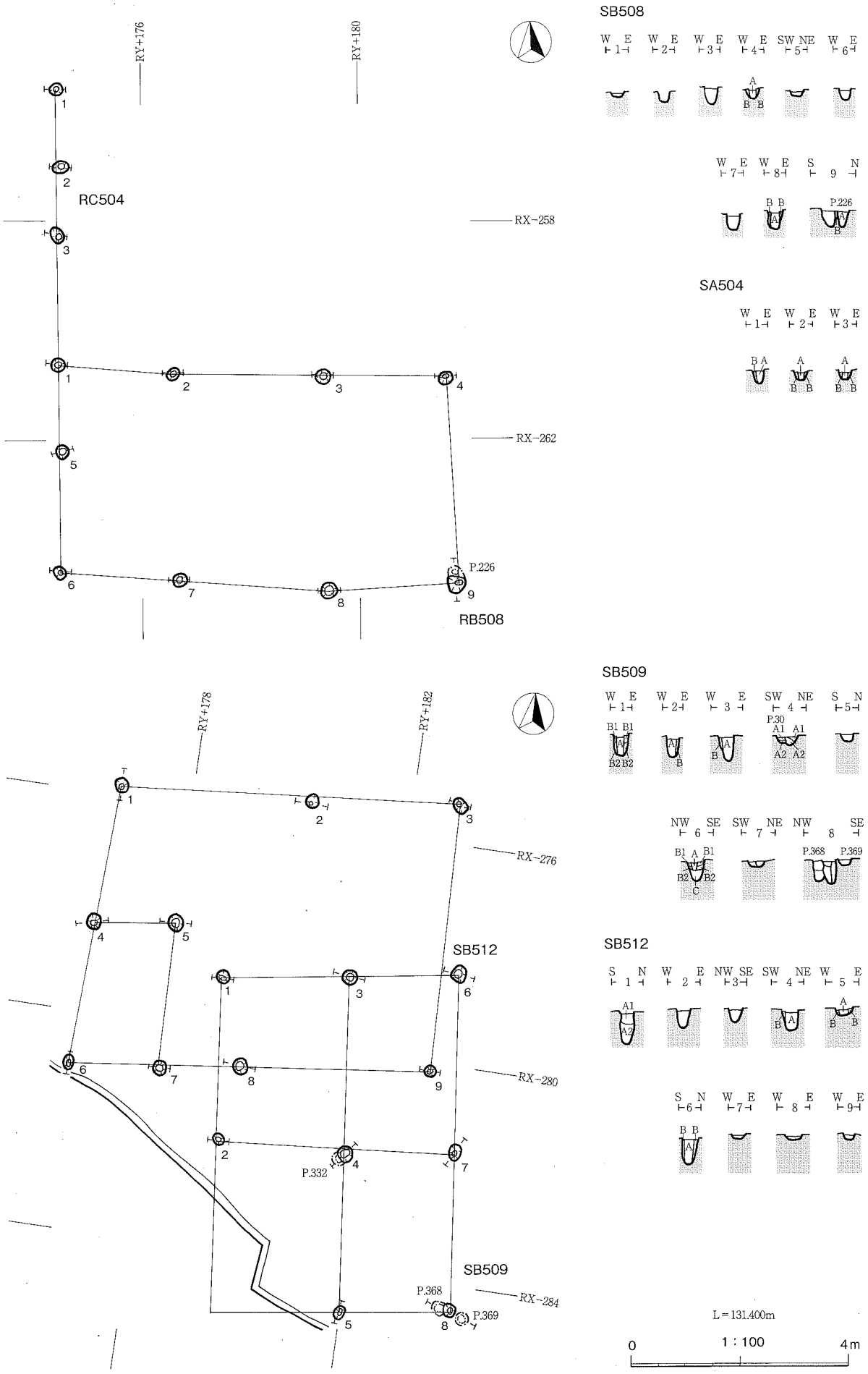
第17図1～10はかわらけである。このうち1～6はロクロかわらけ、7～10は手捏かわらけである。12世紀後半の製品である。11は瓷器系の捏ね鉢の底部破片で、東海地方の製品である。付高台で底部内面が磨滅している。12は須恵器系の甕の体部破片である。内面は同心円状当て具、外面は細かな斜行状のタタキである。13は中国染付皿の口縁部。14は中国白磁の口縁部、15は中国青磁皿の底部破片で、内面にスタンプがある。13～15は15世紀から15世紀の製品である。16は瓦質の甕か手炙りの破片。17は灰釉の土瓶口縁部である。18、19は擂鉢の破片。20は肥前の染付碗、21は肥前の染付皿の底部である。22は寛永通寶の寛文銭である。



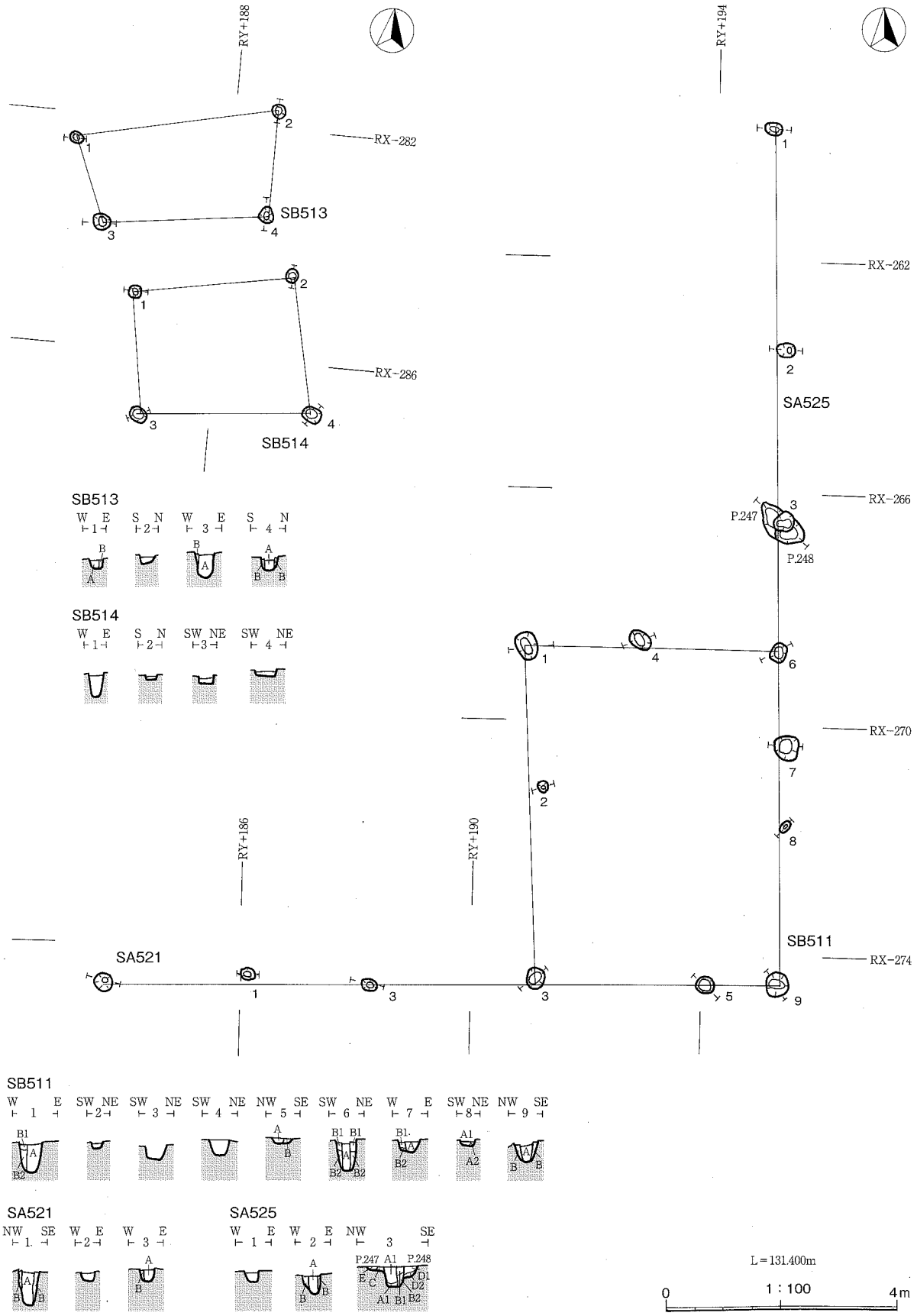

第７図　SI504竪穴建物跡・SD511・512溝



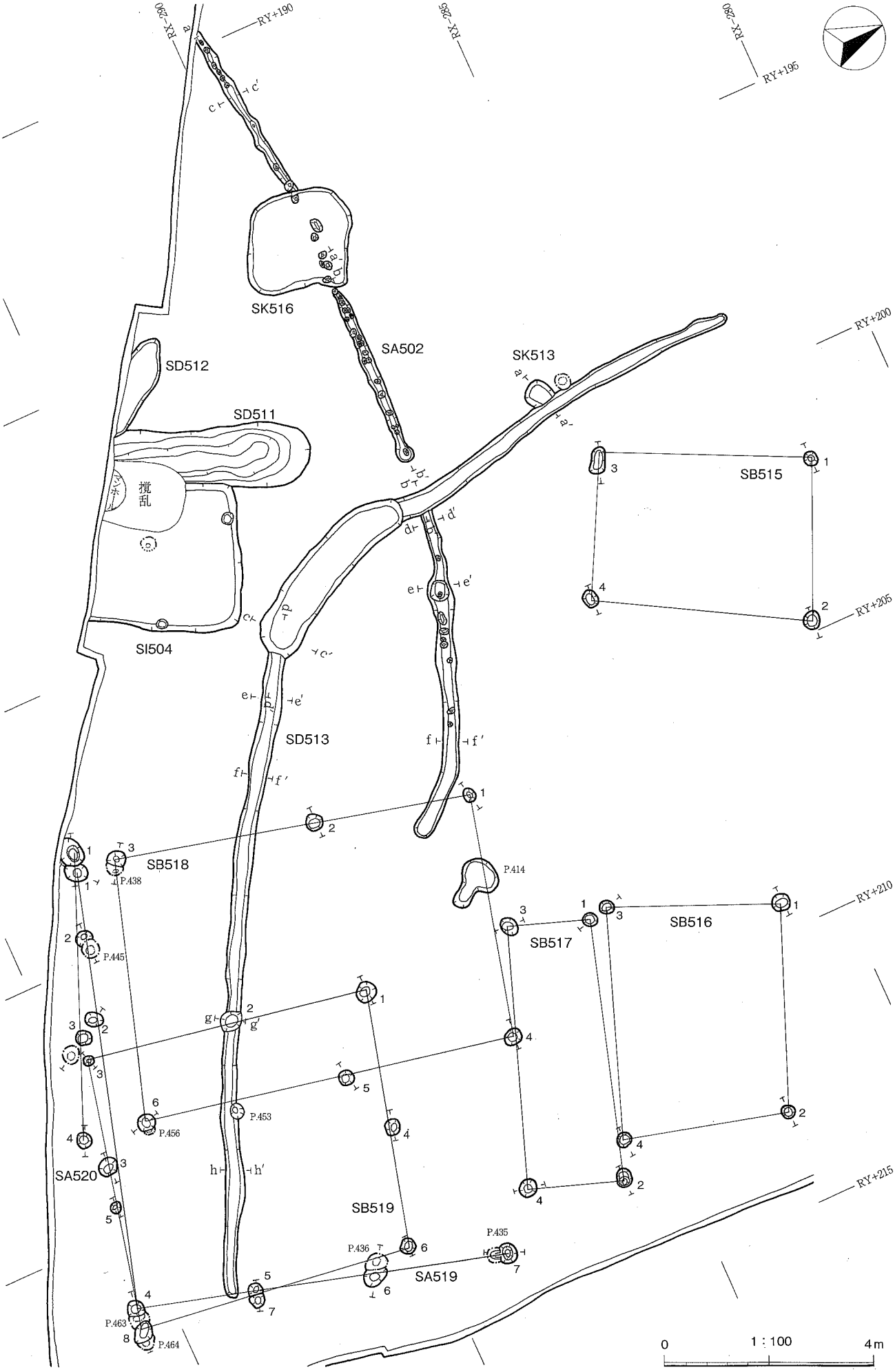

第８図　ＳＢ504・505・506・507掘立柱建物跡



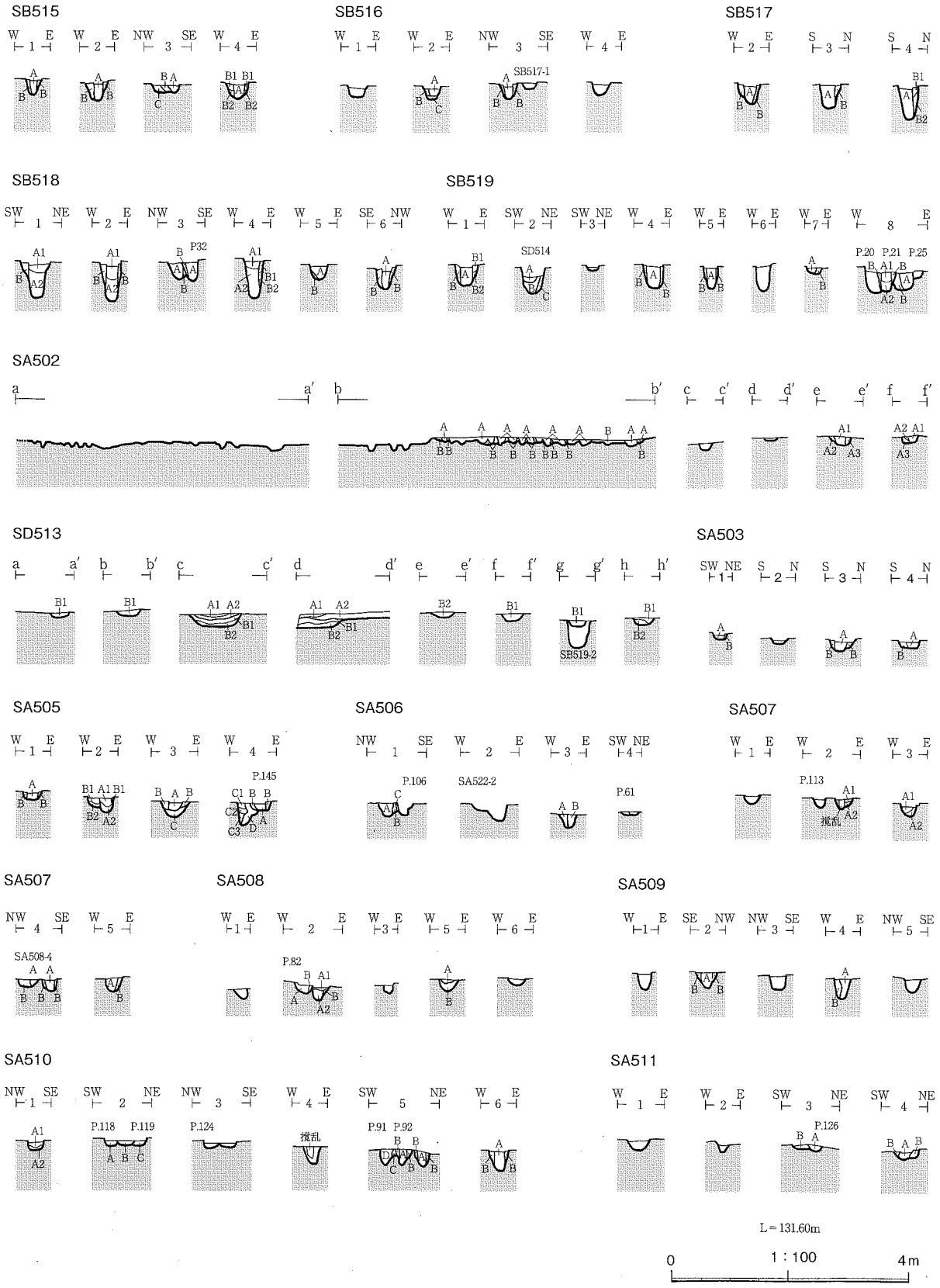

第９図　ＲＢ508・ＳＢ509・512掘立柱建物跡



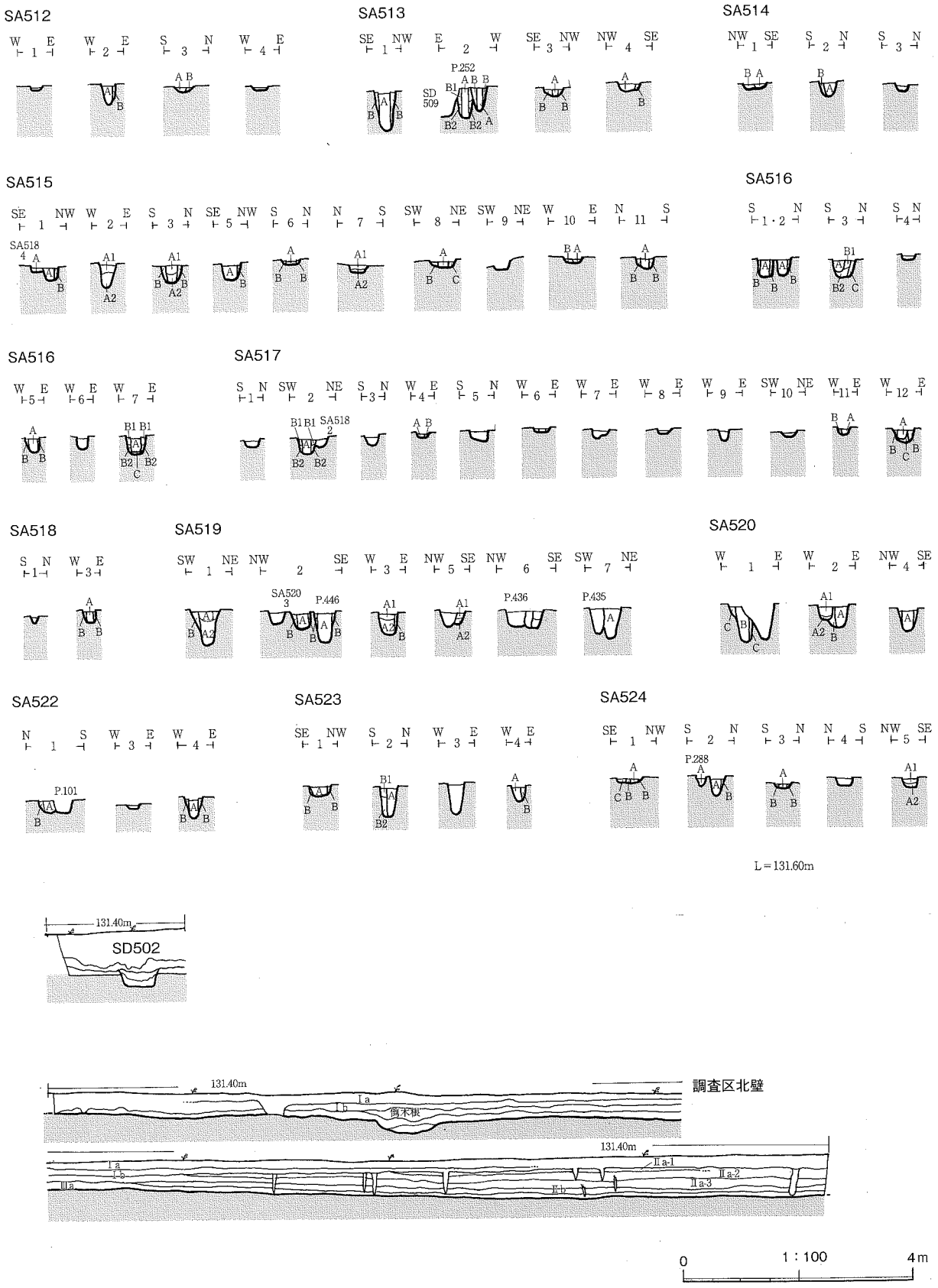

第10図　ＳＢ511・513・514掘立柱建物跡



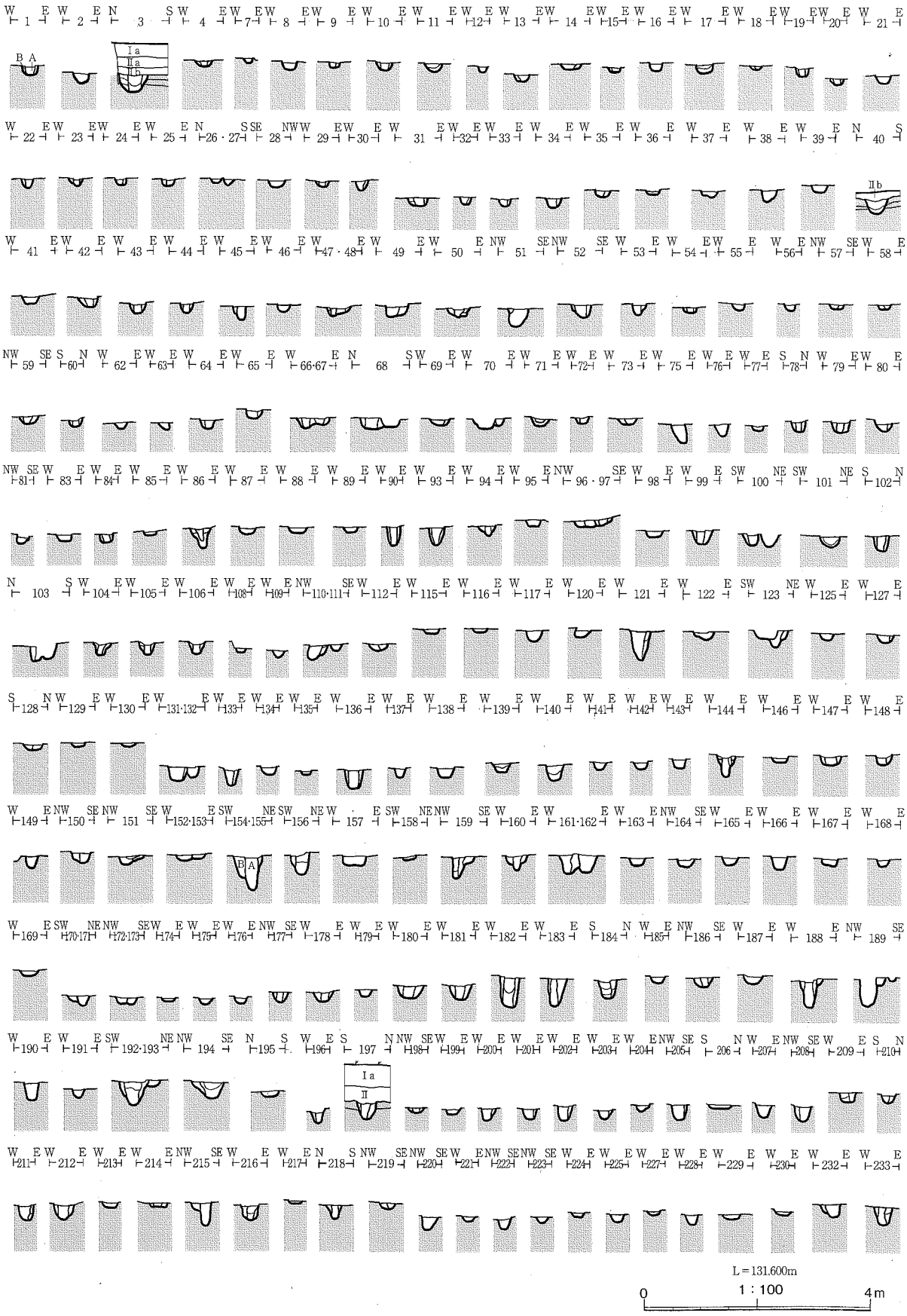

第11図　ＳＢ515・516・517・518・519掘立柱建物跡、SA502柵跡、SD513溝



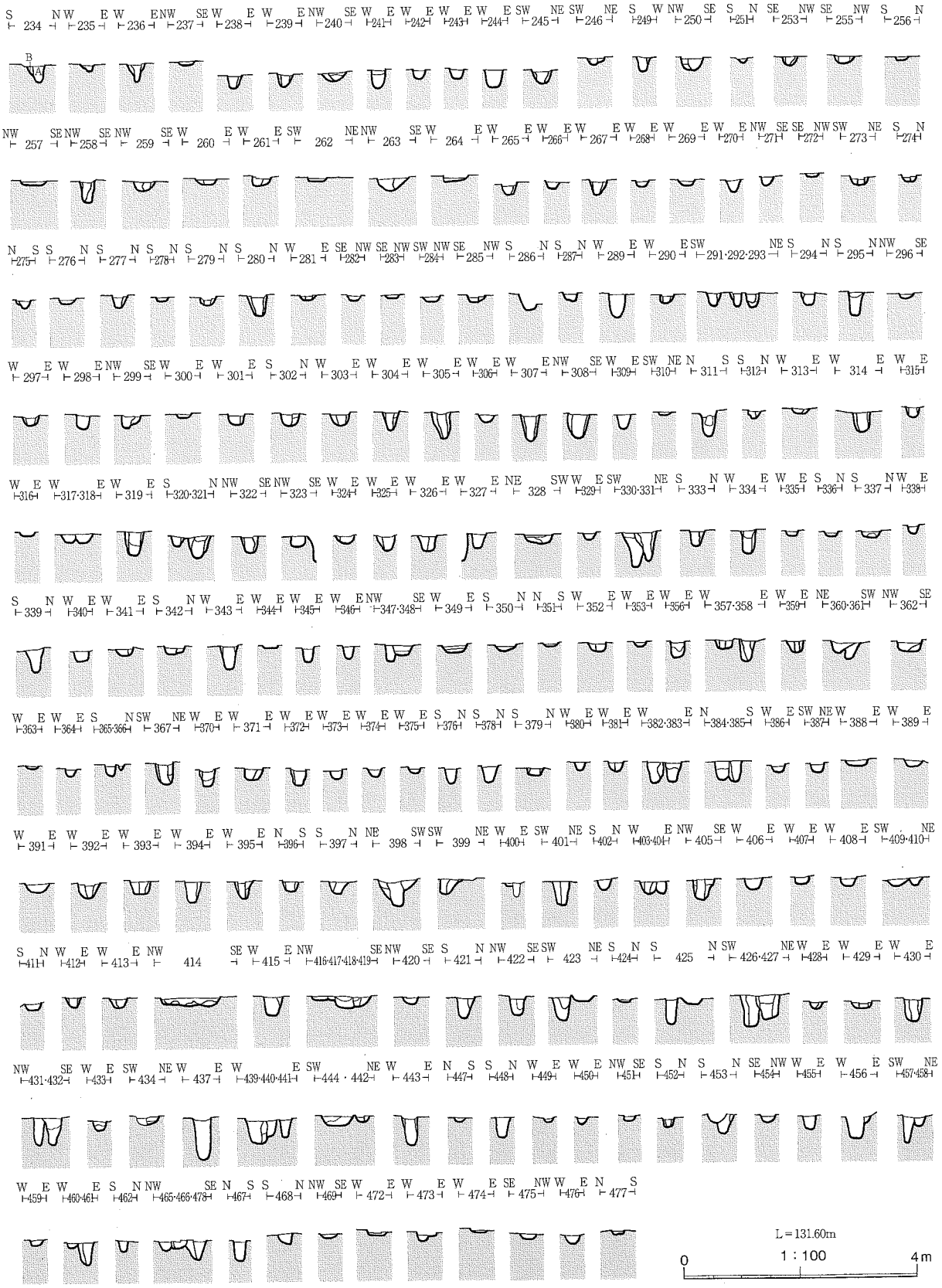

第12図　ＳＢ515～519掘立柱建物跡、SA502柵跡、掘立柱列跡土層断面図



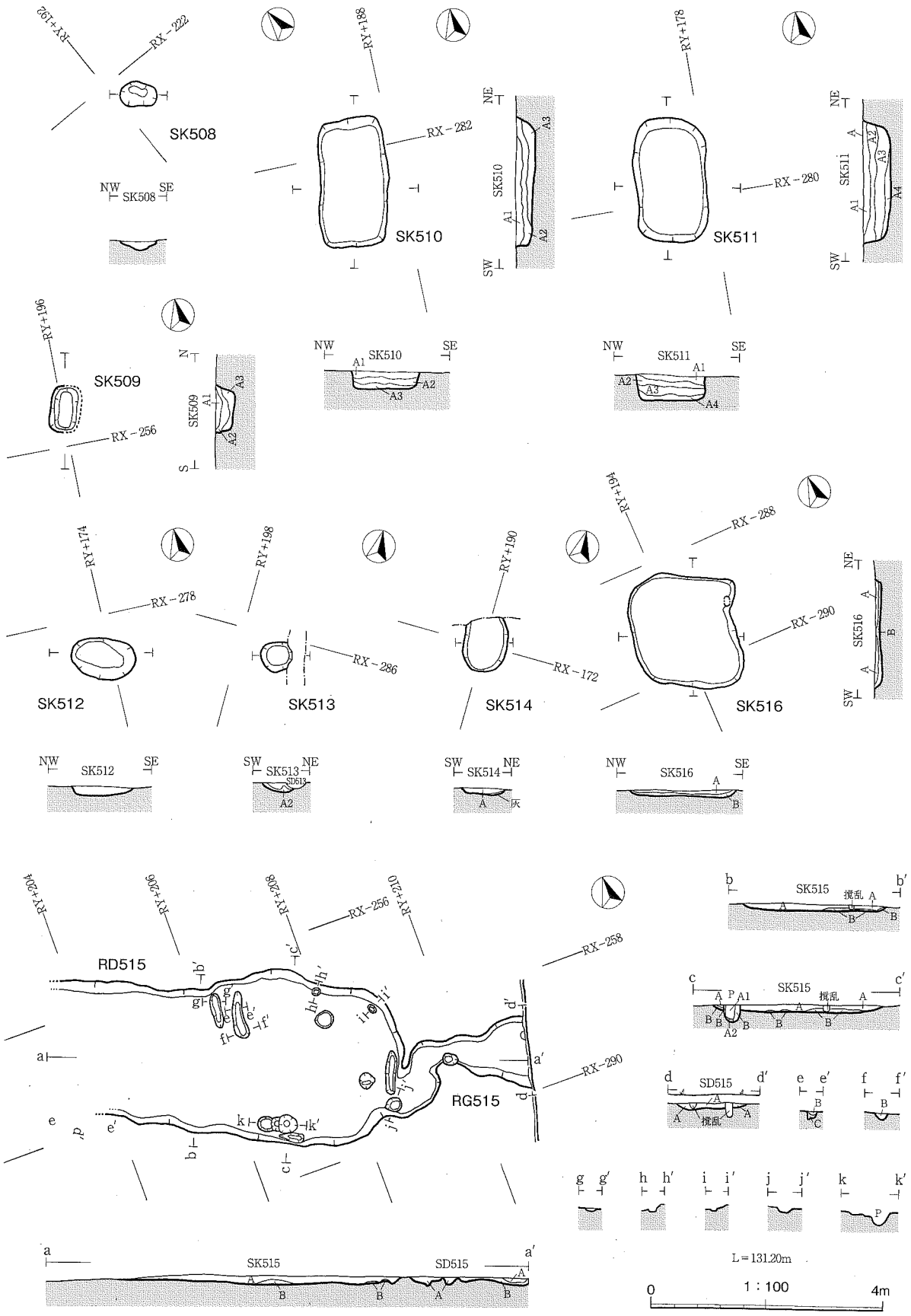

第13図　掘立柱列跡、SD502溝、調査区北壁土層断面図



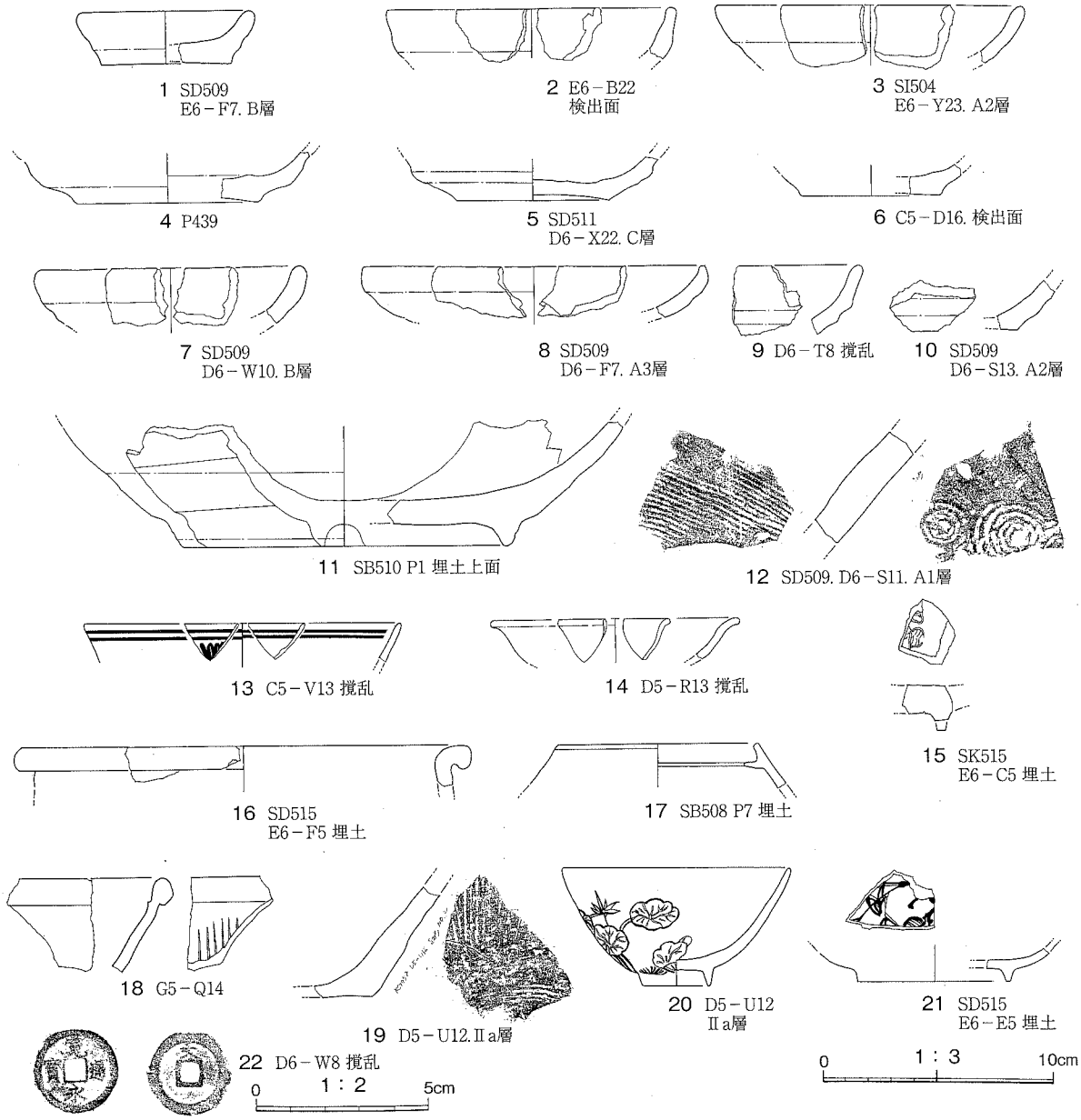

第14図　柱穴土層断面図1




第15図　柱穴土層断面図２


SK508
SK509
SK510
SK511
SK512
SK513
SK514
SK516
RD515
RG515
SK515
SD515
L=131.20m
0
1：100
4m

第16図　土　坑




第17図　古代以降の出土遺物

## 第1表　里館遺跡第58次調査遺構一覧表

### 1 竪穴建物跡

| 遺構番号 | 規模 | | 壁高 | プラン | 方位 | 柱穴 | 床面・施設 | 埋土 | 重複関係 | 時期 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | | | | | | | | | |
| SI504 | 2.8以上 | 2.83 | 0.28～0.32 | 隅丸方形 | N25°E | P1-2本遺構の柱穴ではない | 平坦 | 黒褐色土、褐色土混合 | SD511に切られる | 平安時代末 | かわらけ |

### 2 掘立柱建物跡

| 遺構番号 | 規模 | | | 棟方向 | 柱間寸法 | | 重複関係 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 桁行(m) | 梁間(m) | 廂(m) | | 桁行(m) | 梁間(m) | | | |
| SB504 | 5.88<br>(2間半) | 3.85～4.06<br>(2間) | 1.03<br>(東妻片面) | N84.5°E | 2.3～2.435<br>(7.6尺～8.04尺) | 1.69～2.05<br>(5.6尺～6.77尺) | | 平安時代末以降 | |
| SB505 | 3.88<br>(3間) | 2.45～2.8<br>(2間) | — | 真北 | 0.8～1.35<br>(2.64尺～4.46尺) | 1.4<br>(4.62尺) | | 平安時代末以降 | |
| SB506 | 4.78～4.95<br>(2間) | 4.45～4.55<br>(1間) | — | N85.5°W | 2.05～2.75<br>(6.77尺～9.08尺) | 4.45～4.55<br>(14.7尺～15.02尺) | SA507、508、510、511と重複するも新旧不明 | 平安時代末以降 | |
| SB507 | 6.2～6.35<br>(2間) | 3.6～3.93<br>(1間) | — | N20°E | 2.8～3.4<br>9.24尺～11.22尺 | 3.93～3.6<br>13尺～11.9尺 | | 平安時代末以降 | |
| RB508 | 7.1～7.3<br>(3間) | 3.73<br>(2間) | — | N87.5°W | 2.12～2.74<br>(7尺～9.04尺) | 1.56～2.17<br>(5.15尺～7.16尺) | SA504連結 | 近世 | 土瓶破片 |
| SB509 | 6.14<br>(2間) | 4.34<br>(2間) | — | N7°W | 2.87～3.27<br>(9.47尺～10.8尺) | 1.97～2.37<br>(6.5尺～7.82尺) | SB512、SA517、518と重複するも新旧不明 | 平安時代末以降 | |
| SB510 | 2.66<br>(1間) | (1間?) | — | N52°E | 2.66<br>(8.8尺) | ?<br>(?) | SB511、SA515と重複 | 平安時代末 | 捏ね鉢破片 |
| SB511 | 5.75～5.8<br>(3間 | 4.2～4.4<br>(2間) | — | N1.5°W | 1.6～2.4<br>5.28尺～7.92尺 | 1.98～2.42<br>6.53尺～7.99尺 | SB510、SA515と重複し、SD509より古い | 平安時代末 | |
| SB512 | 6.2～6.65<br>(2間) | 4.9～5.1<br>(2間) | — | N84°E | 2.7～3.5<br>(8.9尺～11.55尺) | 2.55<br>(8.42尺) | SB509と重複し、SK511と共存か? | 平安時代末以降 | |
| SB513 | 2.85<br>(1間) | 1.6～1.8<br>(1間) | — | N79°E | (9.4尺) | (5.3尺～5.94尺) | SK510と重複 | 平安時代末以降 | |
| SB514 | 2.88～3.0<br>(1間) | 2.1～2.35<br>(1間) | — | N81°E | (9.5尺～9.9尺) | (6.9尺～7.8尺) | | 平安時代末以降 | |
| SB515 | 4.1～4.3<br>(1間) | 2.85～3.1<br>(1間) | — | N27°E | (13.5尺～14.2尺) | (9.4尺～10.2尺) | | 平安時代末以降 | |
| SB516 | 3.98～4.4<br>(1間) | 3.34～3.68<br>(1間) | — | N68°W | (13.1尺～14.5尺) | (11尺～12.14尺) | | 平安時代末以降 | |
| SB517 | 5<br>(1間) | 1.6～1.8<br>(1間) | — | N70°W | (16.5尺) | (5.3尺～5.9尺) | | 平安時代末以降 | |
| SB518 | 6.9～7.22<br>(2間) | 4.7～5.02<br>(1間) | — | N13.5°E | 3～3.9<br>(9.9尺～12.9尺) | (15.5尺～16.65尺) | SB519と重複 | 平安時代末以降 | |
| SB519 | 5.36～5.45<br>(2間) | 4.87～4.9<br>(2間) | — | N9.5°E | 2.65～2.82<br>(8.75尺～9.3尺) | 2.18～2.7<br>(7.2尺～8.9尺) | SB518と重複し、SD513に切られる | 平安時代末以降 | |

### 3 掘立柱列跡

| 遺構番号 | 総長(m) | 柱間寸法(m)<br>(尺×間数) | 方　向 | 重複関係 | 時期 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SA503 | 5.00以上 | 0.96～2.0<br>(3.15尺～6.6尺×3間以上) | N３°W | SD502と重複 | 近世？ | |
| RC504 | 5.00 | 2.6～2.4<br>(7.92尺～8.58尺×2間) | N１°W | SB508と連結 | 近世 | |
| SA505 | 10.42 | 3.25～3.76<br>(10.73尺～12.4尺×3間) | N32.5°E | — | 平安時代末以降 | |
| SA506 | 8.82 | 2.75～3.1<br>(9.08尺～10.2尺) | N25.5°E | — | 平安時代末以降 | |
| SA507 | 12.00 | 2.1～4.05<br>(6.93尺～13.37尺×4間) | N28°E | SB506、SA508と重複 | 平安時代末以降 | |
| SA508 | 10.50 | 3.5<br>(11.55尺×3間) | N53°E | SB506、SA507と重複 | 平安時代末以降 | |
| SA509 | 16.20 | 3.8～4.2<br>(12.54尺～13.86尺) | N59°E | — | 平安時代末以降 | |
| SA510 | 13.10 | 4.15～5.6<br>(13.70尺～18.48尺×3間) | N33°E | — | 平安時代末以降 | |
| SA511 | 7.50 | 1.9～2.9<br>(6.27尺～9.57尺) | N37°E | — | 平安時代末以降 | |
| SA512 | 8.96 | 2.98～3.0<br>(9.83尺～9.9尺) | N47°E | — | 平安時代末以降 | |
| SA513 | 7.88 | 2.45～2.8<br>(8.09尺～9.24尺×3間) | N85°W | SD509を掘り込む | 近世？ | |
| SA514 | 7.86 | 1.84～3.28<br>(6.07尺～10.82尺×3間) | N85°W | SA513と併行 | 近世？ | |
| SA515 | 31.5以上 | 2.45～4.55<br>(8.09尺～15.12尺×10間以上) | N69°E | SD510の埋土を掘り込む<br>SB509建物と併存か？ | 平安時代末以降 | 西端・東端曲折 |
| SA516 | 18.75 | 2.8～7.7<br>(9.24尺～25.4尺×4間) | N79°E | | 平安時代末以降 | 5間～6間か？ |
| SA517 | 33以上 | 2.5～6.1<br>(8.25尺～20.13尺×9間) | N77.5°E | SB513北側柱筋と共有 | 平安時代末以降 | SB503建物(34次調査)北妻に接続か? |
| SA518 | 8以上 | 2.7<br>(8.91尺×3間以上) | N69°E | ＳＡ517と重複 | 平安時代末以降 | |
| SA519 | 15.6以上 | 1.45～2.3<br>(4.79尺～7.6尺×6間以上) | N72°W | ＳＡ520と重複 | 平安時代末以降 | Ｌ字形 |
| SA520 | 6.2以上 | 1.62～1.95<br>(5.35尺～6.44尺×3間以上) | N68°W | SA519と重複 | 平安時代末以降 | |
| SA521 | 2.80 | 1.4<br>(4.62尺×2間) | N99°E | SB511南妻に接続 | 近世？ | |
| SA522 | 9.80 | 2.2～3.7<br>(7.26尺～12.21尺×3間) | N１°W | ＳＢ511東側柱に接続 | 近世？ | |
| SA523 | 7.60 | 2.3～2.8<br>(7.59尺～9.24尺×3間) | N88°W | | 近世？ | |
| SA524 | 12.12 | 2.45～3.32<br>(8.09尺～11尺×4間) | N69°E | SD510の埋土を掘り込む | 平安時代末以降 | |
| SA525 | 6.50 | 1.25～1.96<br>(4.13尺～6.47尺×4間) | N11.5°W | ＳＡ517と直交 | 平安時代末以降 | |

4 柵 跡

| 遺構番号 | 布掘溝の規模(m) | | | | 柵 木 | 重複関係 | 時期 | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長さ | 上幅 | 下幅 | 深さ | | | | | |
| SA502 | 16.4以上 | 0.25～0.4 | 0.1～0.2 | 0.05～0.14 | 間断なく並列か？ | SK516、SD513より古い | 平安時代末 | ― | 東半は柵木抜き取りか？ |

5 土坑

| 遺構番号 | 規模(m) | | | プラン | 方向 | 埋土 | 重複関係 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | | | | |
| RD009 | 3.62 | 1.8 | 1.2 | 長楕円形 | N6°E | 黒色～黒褐色土・下部に混合土 | №117柱穴に切られる | 縄文時代 | |
| SK508 | 0.64 | 0.39 | 0.14 | 楕円形 | N41°W | 黒色土主体 | ― | 平安時代末 | |
| SK509 | 0.78 | 0.5 | 0.32 | 隅丸長方形 | N15°E | 黒色土主体 | ― | 平安時代末 | |
| SK510 | 2.18 | 1.18 | 0.32 | 隅丸長方形 | N11.5°E | 黒色土褐色土混合 | ― | 平安時代末 | |
| SK511 | 2.13 | 1.24 | 0.48 | 隅丸長方形 | N8°E | 黒色土褐色土混合 | ― | 平安時代末 | ＳＢ512と共存か？ |
| SK512 | 1.12 | 0.7 | 0.16 | 楕円形 | N70°W | 黒褐色土主体 | ― | 平安時代末 | |
| SK513 | 0.52 | 0.48 | 0.18 | 円形 | N76°E | 黒褐色土主体 | ＳＤ513に切られる | 平安時代末 | |
| SK514 | 0.9以上 | 0.78 | 0.1 | 楕円形 | N7.5°W | 黒褐色土主体 | ＳＤ509に切られる | 平安時代末 | 底面の一部に灰堆積 |
| RD515 | 6以上 | 2.98 | 0.13 | 長楕円形 | N65°W | 暗灰褐色土主体 | ＳＤ515と共存 | 近世 | |

6 溝

| 遺構番号 | 規 模 | | | | 埋土 | 重複関係 | 時期 | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長さ | 上幅 | 下幅 | 深さ | | | | | |
| SD502 | 25以上 | 0.5～0.6 | 0.4 | 0.2 | 黒色 | | 平安時代末 | | |
| SD509 | 33以上 | 0.78～1.2 | 0.65 | 0.3～0.53 | 黒色～黒褐色土 | ＳＫ514を切る | 平安時代末 | かわらけ | 埋土状況から南側に土塁？ |
| SD510 | 30以上 | 1.6～3.2 | 0.9～2.7 | 0.2～0.4 | 黒色土・褐色土混合 | | 平安時代末 | | 凹凸著しい土取溝 |
| SD511 | 3.75以上 | 1.2 | 0.3 | 0.6 | 黒色土～黒褐・暗褐色混合土 | ＳＩ504、SD512を切る | 平安時代末 | | |
| SD512 | 2以上 | 0.65 | 0.5 | 0.1 | 黒褐色土主体 | ＳＤ511に切られる | 平安時代末 | | |
| SD513 | 23.3 | 0.3～0.8 | 0.25～0.6 | 0.1～0.3 | 黒褐色土主体 | ＳＡ502を切る | 平安時代末 | かわらけ | |
| RG514 | 12.18 | 0.88 | 0.3～0.6 | 0.2 | 暗灰褐色土主体 | ＳＤ509を切る | 近世 | | |
| RG515 | 2.3以上 | 0.34～1.26 | 0.2～0.9 | 0.1 | 暗灰褐色土主体 | ＳＫ515と共存 | 近世 | | 近世陶磁器 |

**第2表　里館遺跡第58次発掘調査出土遺物一覧表**

| | 遺　構 | グリッド | 層　位 | 種　別 | 部　位 | 特　徴 | 年　代 | 点数 | 実測図 | 写真 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ＳＤ509 | E6-F7 | Ｂ層 | ロクロかわらけ(小皿) | 口縁部～底部 | 口縁部外反、糸切底 | 12Ｃ後半 | 1 | 17図1 | 10 |
| 2 | ＳＤ509 | D6-W10 | Ｂ層 | 手捏ねかわらけ | 口縁部 | 口縁部内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | 17図7 | 10 |
| 3 | ＳＤ509 | E6-F7 | Ａ3層 | ロクロかわらけ | 体部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 4 | ＳＤ509 | E6-F7 | Ａ3層 | 手捏ねかわらけ | 口縁部～体部 | 口縁部内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | 17図8 | 10 |
| 5 | ＳＤ509 | D6-S12 | Ａ3層 | ロクロかわらけ(大皿) | 底部近く | 体部内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | 17図10 | 10 |
| 6 | ＳＤ509 | D6-X10 | Ａ2層 | 手捏ねかわらけ | 口縁部 | 口縁部内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 7 | ＳＤ509 | D6-S11 | Ａ1層 | 須恵器系陶器甕 | 体部 | 内面同心円状当て具痕、外面斜行状当具痕 | 12Ｃ | 1 | 17図12 | 10 |
| 8 | ＳＤ509 | D6-T11 | Ａ層上部 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 9 | ＳＤ509 | D6-U11 | Ａ層 | ロクロかわらけ | 体部 | 内湾 | 12Ｃ | 1 | | |
| 10 | ＳＤ509 | D6-U10 | Ａ層 | 手捏ねかわらけ | 口縁部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 11 | ＳＤ509 | D6-U10 | Ａ層 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 12 | ＳＤ509 | D6-U10 | Ａ層 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 13 | ＳＤ509 | E6-A8 | Ａ層 | 穴あき石 | 全 | 穴あき | 時期不詳 | 1 | 4図5 | |
| 14 | ＳＤ509 | E6-D10 | Ａ層 | 手捏ねかわらけ | 口縁部 | 薄手 | 12Ｃ中葉～後葉 | 1 | | |
| 15 | ＳＤ509 | D6-U11 | Ａ層 | 縄文式土器 | 体部 | 単節斜縄文に沈線文 | 大木8ｂ式 | 1 | 4図3 | 10 |
| 16 | ＳＤ510 | D6-U12 | 埋土 | 薄い鉄片 | — | — | 時期不詳 | 1 | | |
| 17 | ＳＤ510 | E6-C11 | Ａ層 | 縄文土器 | | | 大木8ｂ式 | 3 | 4図2 | 10 |
| 18 | ＳＤ511 | D6-X22 | Ｃ層 | ロクロかわらけ | 体部下半～底部 | 底部糸切り | 12Ｃ後半 | 1 | 17図5 | 10 |
| 19 | ＳＤ513 | E6-B22 | 埋土 | ロクロかわらけ | 口縁部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 20 | ＳＤ513 | D6-Y18 | 埋土 | ロクロかわらけ | 体部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 21 | ＳＤ513 | E6-A22 | 埋土 | 自然礫 | — | 径3ｃｍ～4ｃｍ | | 4 | | |
| 22 | ＳＩ504 | D6-Y23 | Ａ2層 | ロクロかわらけ | 口縁部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | 17図3 | 10 |
| 23 | ＳＫ511 | D6-N16 | Ａ2層 | 土師器甕 | 体部 | 外面縦ケズリ | 平安時代 | 1 | | 10 |
| 24 | ＳＢ510-P1 | D6-V13 | 埋土上面 | 瓷器系捏ね鉢 | 体部下半～底部 | 付高台、体部下半と高台内へラケズリ、内面底部摩滅 | 12Ｃ後半～13Ｃ前半 | 1 | 17図11 | 10 |
| 25 | ＳＢ508-P7 | D6-O8 | 埋土 | 灰釉土瓶 | 口縁部 | | 江戸時代 | 1 | 17図17 | 11 |
| 26 | 柱穴群 - P439 | E6-C24 | Ｂ層 | ロクロかわらけ | 体部下半～底部 | 底部糸切り | 12Ｃ後半 | 1 | 17図4 | 10 |
| 27 | ＲＤ515 | E6-C5 | 埋土 | 中国青磁碗 | 底部付高台 | 内面見込みにスタンプ | 15Ｃ | 1 | 17図15 | 11 |
| 28 | ＲＤ515 | E6-E5 | 埋土 | 肥前染付皿 | 底部付高台 | | 18Ｃ～19Ｃ | 1 | 17図21 | 11 |
| 28 | ＲＤ515 | E6-Ｆ5 | 埋土 | 瓦質手焙り | 口縁部 | | 18Ｃ～19Ｃ | 1 | 17図16 | 11 |
| 30 | ＲＤ515 | E6-E5 | 埋土 | 瓦質手焙り | 体部 | | 18Ｃ～19Ｃ | 1 | | |
| 31 | ＲＤ515 | E6-D5 | 埋土 | 土器 | 体部下端 | | 18Ｃ～19Ｃ | 1 | | |
| 32 | 遺物包含層 | D5-V13 | Ⅱa層 | 石鏃 | | 有茎 | 縄文時代 | 1 | | 10 |
| 33 | 遺物包含層 | D5-U12 | Ⅱa層 | 肥前染付高台付碗 | | | 18Ｃ～19Ｃ | 1 | 17図20 | 11 |
| 34 | 遺物包含層 | D5-U12 | Ⅱa層 | 鉄釉擂鉢 | 底部 | 内面櫛目 | 17Ｃ～18Ｃ | 1 | 17図19 | 11 |
| 35 | 遺物包含層 | D5-U16 | Ⅱa層 | 肥前青磁香炉 | 体部 | | 17Ｃ～18Ｃ | 1 | | |
| 36 | | D6-X8 | 確認面 | 手捏ねかわらけ | 底部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 37 | | D5-O16 | 確認面 | ロクロかわらけ | 底部 | 糸切り | 12Ｃ後半 | 1 | 17図6 | 10 |
| 38 | | D5-Q14 | 確認面 | 備前擂鉢 | 口縁部 | 焼締め | 17Ｃ | 1 | 17図18 | 11 |
| 39 | | D5-Q14 | 確認面 | 軟質陶器徳利？ | 体部 | 透明釉 | 江戸時代 | 1 | | |
| 40 | | D5-V13 | 撹乱 | 中国染付皿 | 口縁部 | | 15Ｃ～16Ｃ | 1 | 17図13 | 11 |
| 41 | | D5-W13 | 確認面 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 42 | | D5-R13 | 撹乱 | 中国白磁皿 | 口縁部 | 外反、漆補修痕跡 | 15Ｃ～16Ｃ | 1 | 17図14 | 11 |
| 43 | | D6-S6 | 撹乱 | 備前擂鉢 | 体部 | 内面に櫛目 | 17Ｃ | 1 | | |
| 44 | | D6-T8 | 撹乱 | ロクロかわらけ | 口縁部～体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | 17図9 | 10 |
| 45 | | D6-U18 | 確認面 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 46 | | D6-W8 | 撹乱 | 寛永通寶 | | 寛文銭 | 17Ｃ後半 | 1 | 17図22 | 11 |
| 47 | | D6-W10 | 確認面 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 48 | | D6-X18 | 確認面 | 手捏ねかわらけ（小皿） | 底部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 49 | | D6-X4 | 確認面 | 縄文土器 | 体部 | 羽状縄文 | 縄文時代前期 | 1 | 4図1 | 10 |
| 50 | | D6-Y10 | 確認面 | 肥前染付皿 | 底部 | 蛇の目凹形高台 | 18世紀後半～19世紀 | 1 | | |
| 51 | | D6-U10 | 確認面 | 自然礫 | | 破砕 | | 1 | | |
| 52 | | D6-S8 | 撹乱 | 鉄片 | | 管状 | | 1 | | |
| 53 | | D6-X10 | 確認面 | 剥片 | | 瑪瑙 | 縄文時代 | 1 | | |
| 54 | | D6-T8 | 撹乱 | 手捏ねかわらけ | 口縁部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | | |
| 55 | | E6-B22 | 確認面 | 手捏ねかわらけ | 口縁部 | 内湾 | 12Ｃ後半 | 1 | 16図22 | 10 |
| 56 | | D6-R18 | 確認面 | 手捏ねかわらけ | 体部 | | 12Ｃ後半 | 1 | | |

# Ⅳ 総 括

今回の調査では縄文時代から近世に至る遺構と遺物が確認された。縄文時代は前期から中期の土器破片が出土しており、陥し穴状土坑が1基存在する。周辺から石鏃や剥片等が出土していることから、縄文時代中期以後の狩猟の場所であったことがわかる。

平安時代末期の遺構のうち、調査区中央部にはSD509外溝とSD510内溝が併行する。内溝はプラン・断面ともに凹凸の著しい土取の溝であり、両方の溝の間隔や、SD509外溝の堆積土が内側（南側）から多く流入している状況からみて、内外の溝の間には溝の掘削土で構築した土塁が存在した可能性が高い。SD590外溝は南西端で鍵形に曲折して途切れており、南側調査区外に存在する空堀（現状では埋没）との間には虎口を形成する。この外溝南西端から東に9mの位置にSB510櫓状建物跡（掘立柱建物跡）が存在する。大形の柱穴2口がSD510内溝内に掘り込まれており、内側から土塁に乗りかかる形で設けられた櫓と考えられる(4)。北側の2本の柱は、SD509・510溝の間に存在した土塁上に設置されていたために削平されたと考えられる。SD510内溝の埋没後にはSA515掘立柱列跡が造られ、そのプランはSD509外溝の形状に対応している。この時には土塁やSD509外溝がまだ機能しており、SA515柱列は土塁内側に設けられた桟敷（さじき）の柱列と考えられる。この柱列の西端には2間四方のSB507掘立柱建物が存在するが、その位置から虎口の衛所のような施設であろうか。また新旧関係は把握できなかったが、SA516・517・518柱列はこれらの遺構と近似した方向で存在し、特にSA517掘立柱列は門跡と推定されるSB508掘立柱建物を伴う。この南側にも1間四方のSB509掘立柱建物が存在する。これらはSD509外溝やSD510内溝や、これに付帯していたであろうSB510掘立柱建物跡、SA515掘立柱列跡、SB507掘立柱建物跡とは、新旧関係は不明ながら時期の異なる遺構であることは間違いない。重要なのはこの場所に一貫して区画施設が設けられていたということである。ここで一旦調査区外に目を転じてみる。

第2図は里館遺跡の中世城館の縄張を示す。これまでの発掘調査で確認された堀や溝の位置を基準に、藩政時代末期の下厨川村絵図(5)昭和24年（1949）の航空写真(6)から判読される土地区画をもとに復元を試みた。段丘崖に沿って東西400mに渡ってⅠ～Ⅶの7郭が並列しており、里館と呼ばれていたのは東側のⅥとⅦが該当する。寛文八年（1668）の奥州岩手郡栗谷川古城図(7)では、里館の西方に勾當舘（勾当館）が記されており、その南側の低地はかつて勾当下と呼んでいたという。このことから勾当館というのは第34次調査区と第58次調査区の南側の段丘縁辺部の呼称であったと推定できる。南西端のⅠは大正13年ごろ、国鉄橋場線（現在の秋田新幹線）建設に伴って削り取られて残存しないが、その輪郭は土地区画から復元できる。今回の第58次調査区は西端から二郭目のⅡの北側に位置する。調査区の南側を通じる道路はⅡの北側の空堀に沿い、ⅠとⅡの西側空堀はⅠの西側では幅広く、2列の水田区画により二重堀であったと考えられる。ⅠとⅡは空堀で分割され、東側に略方形のⅢがあり、ⅠからⅢは概ね同一高度であるが、東側のⅣ・Ⅴは順次低くなっている。Ⅰ・Ⅱの西方約80mあたりから西方は緩やかに低くなっており、地形と縄張りからⅠ・Ⅱ・Ⅲあたりが勾当館の主体部分であることは間違いない。一方東側里館の主体部はⅥ・Ⅶと考えられる。中間低位部分のⅤが何れに属するのかはよくわからない。

再び調査区内に戻る。第58次調査東側では、平成4年度に第34次調査が実施されており、南北方向の溝と三間四面の掘立柱建物跡1棟、これに重複する竪穴建物跡1棟2間×1間の掘立柱建物1棟、土

坑　基、柵跡１列が確認されている。このうち南北方向の溝は南端で幅広く深くなって、この南側にある空堀に開口し、流入していたものであろう。四面廂建物や竪穴建物、柵はこの溝や南側の堀と方向を合わせており、遺構の同時性が窺える。また第58次調査のSB513、512、SA519、SI504竪穴建物跡も南側の堀と併行している。これ等一連の遺構のありかたは、本調査区と調査区外の曲輪との密接な関連性を示すものである。12世紀後半に南側段丘縁辺のⅠ～Ⅱに空堀をめぐらせた曲輪が存在し、北側の後背湿地に面して城館の外郭部分が構築されていた。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがいつから３区画に分割されたのかは明らかではないが、12世紀後半にはⅠ・Ⅱを囲む堀は存在した可能性が高い。SD509溝は北東から南西方向へ開削されて、空堀から20ｍ余りのところで溝の西端がＺ字状に曲折する。この堀とSD509・510溝とに囲まれた範囲が、段丘崖付近を主郭とする城館の外郭部であり、内部は溝で数区画に分かれ、それぞれに掘立柱建物や竪穴建物による屋敷が存在したのである。これを構成する溝や、竪穴建物、柱穴などから12世紀後半代のかわらけが出土している。ロクロ整形のものと手捏ね整形のものがあり、平泉遺跡群（平泉町）や比爪館跡（紫波町）をはじめとする奥州藤原氏関係遺跡のかわらけとも共通する。また瓷器系捏ね鉢も概ね同時期のものであるが、東海地方の尾張、三河、遠江のいずれかの窯の製品と考えられる(8)。また珠洲の可能性のある須恵器系甕破片も12世紀代の製品である。

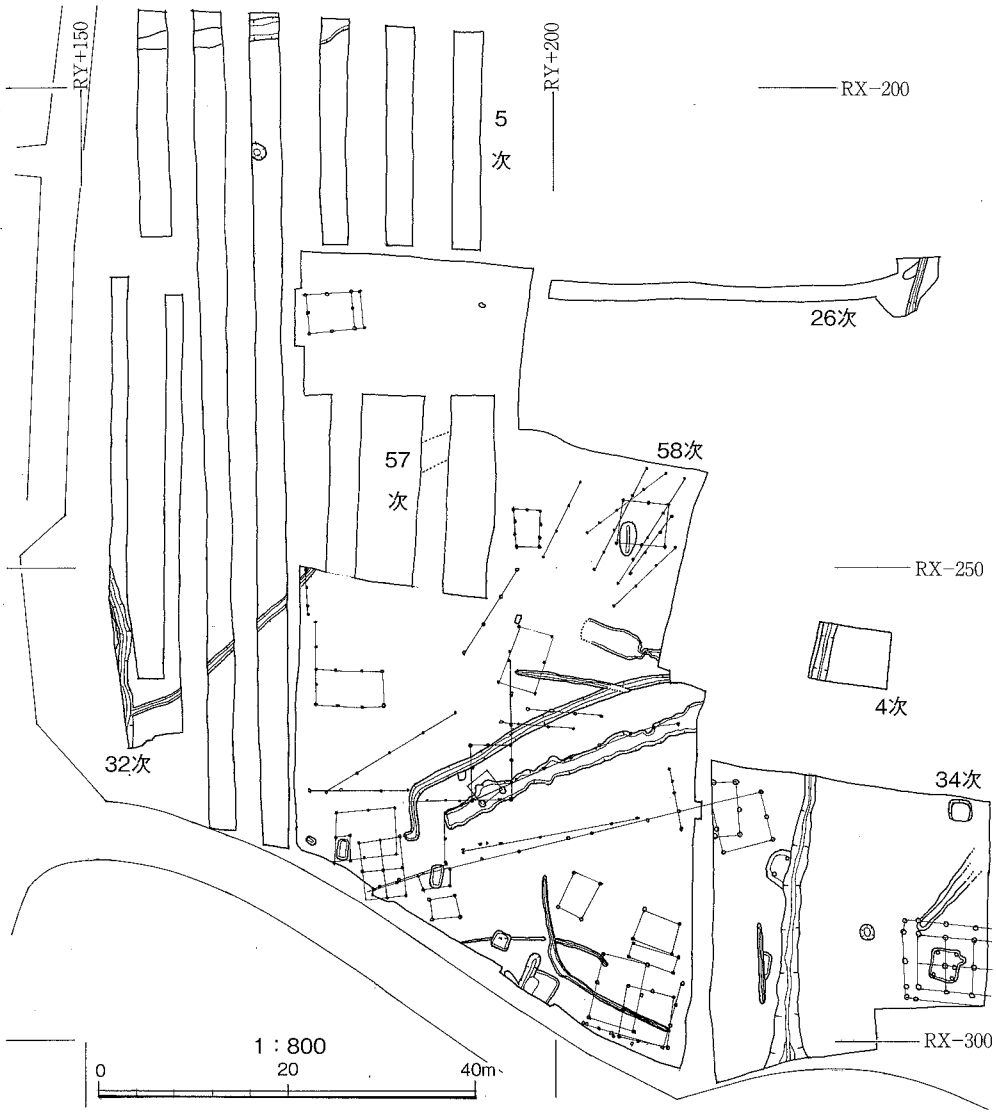
区画・防御施設は土塁内外の溝であり、これに取り付く櫓状建物や桟敷と推定される柱列は、区画であると同時に外敵に対する備えであろう。SD509溝の北側には自然低地に沿って柱列が重複しており、これも防御のための備えであるのかもしれない。SD509内側の城館内では、かわらけを用いた儀礼行為や宴が催されており、南側の段丘崖近くに存在する城館の外郭部分と考えられる。これまで里館遺跡は安倍館遺跡（栗谷川城跡）とともに中世工藤氏の城館として認識されていたが、今回の調査の結果、平泉藤原氏時代の城館の存在が明確になった。また僅かながら15世紀から16世紀の中国青磁皿、白磁皿、染付皿の破片が散見されるのは、14世紀以後、遺跡東半部を中心とする工藤氏の城館に関連する遺物であろう。このほかに江戸時代の溝や土坑、柱穴があり、寛永通寶や近世陶磁器類が確認されているが、これらは江戸時代下厨川村の営みを示す遺構と遺物である。

里館遺跡は1960年代から急速に市街化が進行し、現在では住宅などの小規模調査が多くなっている。広い面積を調査する機会は今回が最後になると思われる。この遺跡は安倍館遺跡とともに安倍氏の厨川柵・嫗戸柵の擬定地であったが、残念ながら今回の調査でも安倍氏時代の遺構遺物は確認できなかった。安倍館遺跡・里館遺跡が中世工藤氏の城館跡であることは、これまでの調査で明らかであるが、今回の調査で奥州藤原氏全盛期の12世紀後半にすでに城館が構えられ、その外郭部の構造の一端が明らかになった。地形と地割の検討から、遺跡は西方へ広がりをもつ可能性があり、今後は関連遺構の広がりを念頭に調査を進め、遺跡範囲の確定と内容解明に努めたい。また本遺跡の西方の稲荷町遺跡や大館町遺跡でも12世紀の遺構遺物が確認されている。今後は周辺遺跡の内容とともに、遺跡相互の関連性についても究明されなければならない。

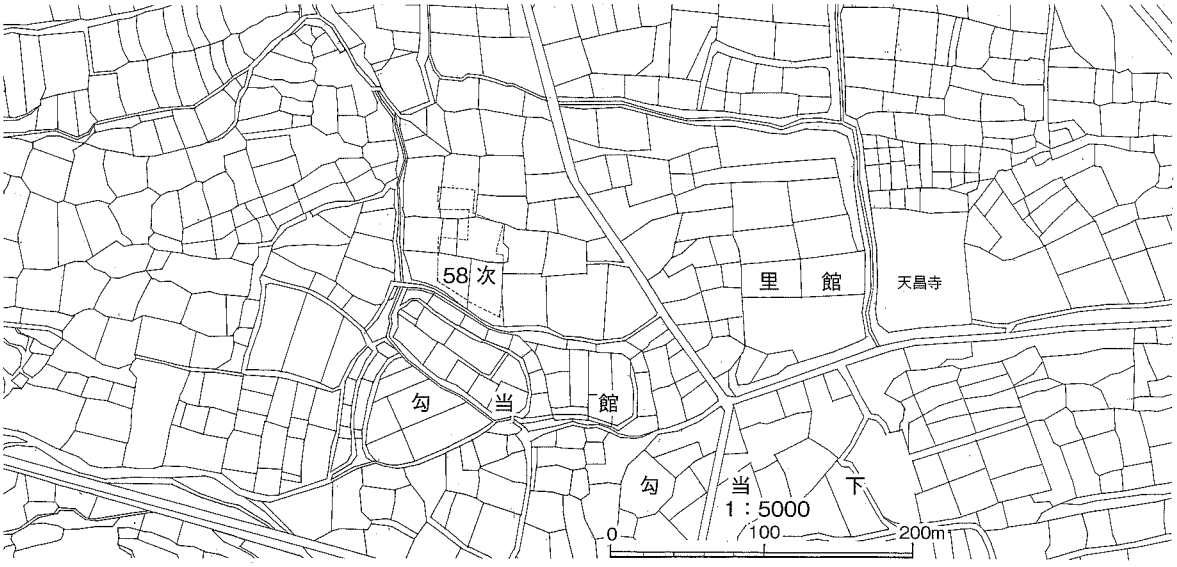
註　(1) 盛岡市遺跡の学び館 2012.10（『検証、厨川柵』第11回企画展図録）

(2) 天昌寺町に所在する曹洞宗寺院。寺伝では安倍氏の時代から厨川柵近くに存在した寺院とされている。厨川工藤氏の菩提寺である。

(3) 盛岡市教育委員会 1999『安倍館遺跡－厨川城跡の調査―』




第18図　里館遺跡西部の遺構




第19図　里館遺跡の地割（1949年米軍撮影空中写真より判読）

(4) 塁線や築地線に内側から乗りかかる形式の櫓の遺構は、古代城柵の多賀城跡南辺部築地線の櫓（多賀城跡調査研究所 1971）や払田柵遺跡外郭南門両側の石塁に取り付く櫓（払田柵跡調査研究所 1999）などに類例があり、どちらの遺構も内側のみに柱列が存在する。また中世城館では福島県田村郡三春町の西方館跡（三春町教委 1988）の主郭虎口の櫓門は土塁の開口部に門扉の付く本柱があり、左右の土塁内側に門の櫓を支える柱列が存在している。

(5) 岩手県立図書館収蔵。

(6) 米軍撮影。国土地理院収蔵。

(7)『寛文八年奥州岩手郡栗谷川古城図』（もりおか歴史文化館収蔵）

(8) この製品について、岩手県立博物館の羽柴直人氏と平泉町役場の八重樫忠郎氏、愛知県田原市教育委員会の増山禎之氏は常滑の製品で 12 世紀の第 3 四半期のものとした。羽柴氏によれば、平泉遺跡群の出土遺物では常滑に分類していたものに該当するという。一方、愛知県常滑市歴史民俗資料館の中野晴久氏は常滑の製品ではなく東海地方のいずれかの窯の製品とした。また一関市教育委員会の鈴木弘太氏は常滑の捏ね鉢で年代は 13 世紀に降る可能性有りとした。生産地、年代ともに一定していないが、現段階では 12 世紀後半から 13 世紀前半ごろまでの間の製品としておきたい。

参考文献

秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 1999.3（『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』秋田県文化財調査報告書 289 集」）

三春町教育委員会 1988『西方館跡』

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1971.3（『多賀城跡－昭和 45 年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究年報 1970）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | さだていせき |
| 書　　名 | 里館遺跡 |
| 副 書 名 | 宅地造成及び共同住宅建築に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書 |
| 巻　　次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編 著 者 名 | 室野秀文　鈴木俊輝 |
| 編 集 機 関 | 盛岡市遺跡の学び館 |
| 所 在 地 | 〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1　ＴＥＬ019－635-6600 |
| 発 行 機 関 | 工藤善蔵　　盛岡市教育委員会 |
| 発行年月日 | 2014年4月30日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所 在 地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>世界測地系 | 東経<br>世界測地系 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| さだていせき<br>里館遺跡 | いわてけんもりおかし<br>岩手県盛岡市<br>きたてんしょうじ ちょう<br>北天昌寺町<br>10－1・11－1<br>12-1・16－2・16-3 | 3201 | | 39°<br>42′<br>42.2″ | 141°<br>7′<br>4.3″ | 2013.10.15<br>～<br>2013.12.26 | 2,209 | 宅地造成及び共同住宅建築 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 里館遺跡<br>(第58次調査) | 狩猟 | 縄文時代 | 陥し穴状土坑 | 1 | 縄文土器・石鏃 | 平安時代末期12世紀後半を主体とする城館の外郭施設と考えられる。中世後期の陶磁器も散見される。 |
| | 城館 | 平安時代末<br>～<br>中世 | 掘立柱建物跡 | 10 | ロクロかわらけ<br>手捏ねかわらけ<br>瓷器系捏ね鉢<br>中国青磁・白磁・染付 | |
| | | | 掘立柱列跡 | 18 | | |
| | | | 柵　　跡 | 1 | | |
| | | | 竪穴建物跡 | 1 | | |
| | | | 土　　坑 | 7 | | |
| | | | 溝　　跡 | 6 | | |
| | | 平安時代末～近世 | 柱　　穴 | | | |
| | 集落 | 近世 | 土　　坑 | 1 | 近世陶磁器・寛永通寶 | |
| | | | 溝　　跡 | 2 | | |

| | |
|---|---|
| 要　　約 | 雫石川北岸段丘上に位置する遺跡北西部の調査。調査区中央部の2条の溝の形状や溝内堆積土のありかたから、溝の間に土塁が存在した可能性が高く、これに取り付く櫓状建物跡や桟敷と推定される柱列跡が伴うほか、西端は溝が曲折して虎口を形成している。周辺には低地に沿った柱列跡、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、柵跡が確認されたほか、調査区南側の段丘縁辺部には空堀が廻る曲輪が存在している。この曲輪との位置関係や出土土器の年代から、今回の遺構群は12世紀後半の城館外郭施設と考えられる。 |

遺跡遠景（南から：背景は岩手山）

遺跡全景（西から）

第２図版

調査区全景（右が北）

調査区南東部（右が南）

調査区南東部（北西から）

北側調査区全景

第４図版

SD509 外溝、SD510 内溝

SD509 外溝、SD510 内溝

SD509 外溝、SD510 内溝

SB510 櫓状掘立柱建物跡 P1 土層断面（右上は瓷器系捏ね鉢）

SB510 櫓状掘立柱建物跡 P2 土層断面

SD509 外溝、SD510 内溝（北西から）

第 6 図版

SD509 外溝、SD514 土層断面（西から）

SD509 外溝土層断面（東から）

SD509 外溝土層断面、かわらけ出土状況

SI504 竪穴建物跡

SD511 溝

SD511 溝かわらけ出土状況

第８図版

SK510 土坑

SK511 土坑

SK510 土坑土層断面

SA502 柵跡、SD513 溝（西から）

SA502 柵跡土層断面（北から）

RD009 陥し穴状土坑（北から）

出土遺物１　平安時代末期の土器、陶器（外面）

出土遺物１　平安時代末期の土器、陶器（内面）

出土遺物 2　中近世の陶磁器

出土遺物 2　近世の磁器

# 里館遺跡

—宅地造成及び共同住宅建築に係る埋蔵文化財調査—

2014年5月16日　発行

編　集　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019 － 635 － 6600

発　行　工　藤　善　蔵　　盛岡市教育委員会

印　刷　河北印刷株式会社
〒020-0015　盛岡市本町通2丁目8-7
TEL 019 － 623 － 4256